其二　彼の男性に對する見解

愛情と勢譽

愛情と勢譽。如何に人類の上に配劑せられつゝあるか。男性は勢譽に煩はされ、女性は愛情に率かる。男性と女性。主人公の勢譽に動かさるゝ例。『かげな隠す』は母の慈悲、打つ杖は父の慈悲』。親の愛は兩性の愛より理性に富む。子の親に對し、兄弟の相對し、主從の相對し、朋友の相對する。愛の動力愈薄弱にして、勢譽の動力愈厚强。

人生企圖の動機は固より一二に止らざるなり。感情の動く所智識の判する所意志の向ふ所時により處により萬種又千種ならざるを得ず。然れども之を概括し來れば個人想を挑發するの最大動機が愛情と勢譽とに在ること吾人が已に門左衛門の戯曲によりて歸納し得たる所なりき。啻に門左衛門の戯曲によりて之を歸納し得たるのみな

如何に人類の上に配劑せられつゝあるか

男性は勢譽に煩はされ、女性は愛情に率かる

らず、世上亦稍低度なる意味に於て兎角浮世は色と慾と叫ぶことと人の能く知る所なり。唯門左は所謂色なるものよりは高き愛を畫き慾なるものよりは寧ろ主として高尚なる榮譽を畫きたりしのみ。而して所謂愛情と勢譽とが如何に人類の上に配劑せられつゝある乎、精しく言へは男性若くは女性の上には如何に彼等が其個人想を形つくる爲に其威力を施しつゝある乎。是れ豈更に一段の講究を要するに足るものならざらんや。

吾人が門左衛門の戯曲によりて歸納し得たる所に據れば、二者共に大なる力を有するは勿論なれども、男性は比較的に勢譽に煩はさるゝ所あり、女性は比較的に愛情に惹かるゝ所あるに似たり。是れ固より幾多の例外を有するのみならず、二者合縱して人を動かすを世の常とし、其男性を動かし易き勢譽の如きも實際は愛情の基礎に立

男性と女性

ちたる第二段の勢譽なるを最も多しとするものゝ如し。

去れとも普通の場合に於ては、男性は常に勢譽の爲に自ら動くの傾あるなり。女性は常に愛情に牽れて男性の命運を其命運とするの傾あるなり。男性は主働者たるなり。女性は隨伴者たるなり。男性は自ら其命運を定むると共に幷せて女性の命運を定むる者たるなり。女性は男性の命運を其命運として男性の苦樂生死に同情を表する者たるなり。其事情や其狀況や人其性情を同ふせさると共に同ふせずと雖、其愛情と勢譽とに由て動かさるゝ所以は一ならざる莫し。

主人公の勢譽に動かさるゝ

試に其然るや否やを判すべく、吾人をして先づ彼が畫きたる男性の何如を檢せしめよ。

彼が畫きたる男性の中に就きて特に其主人公として擇ばれたるものを見るに、龜屋の世嗣忠兵衛の如き、世に傑出したる者にあらざる

は固よりなれども、之を一個の市民として見れば決して席末に座せしむべき者にあらざりしなり。一の飛脚問屋として、商賣功者、駄荷づもり、江戸へも上下三度笠、茶の湯俳諧碁雙六、のべに書く手の角取れて、酒も三つ四つ五つ所紋羽二重も出ず入らず、無地の丸鍔象眼の國細工には稀男なるもの、もとは大和新口村勝木孫右衛門と云ふ大百姓の一人子として自らしまりなき所なきにあらずと雖、龜屋の家風に似合しからざる奢侈なる所なきにあらずと雖、又斯る育ちをなしゝものゝ常として忍辱の克己力に缺く所なきにあらずと雖、彼が誠實にして情に厚きものなることは鬼とも組んず八右衛門をしてほろりと涙ぐましめたる所。固より梅川をして愈馴れて愈其愛を增さしめたるに足りしものなり。此の如き彼にして悪ぞ『何をあてに人の金封を切て撒散らし、詮議に逢ふて牢擂の繩にかゝるのといふ

耻と此耻(金に窮したりとの耻)と替らるゝか。耻かく計りか梅川(其酷愛する所の梅川)は何となれとといふことぞ。』といへる如き見易き道理を見ることと能はさらんや。然れども其竟に八右衛門か稠人中に於ける皮肉の嘲罵を忍ぶ能はずして、五十兩を其額に投付けたりしものは、誤れるながらも其躰面の重きを死よりも重しとし、時としては愛よりも重しとしたるが爲にあらずや。所謂『ふつと手を掛けて、もう引れぬは男の役。』なりしが爲にあらずや。

去れは今こそ町人八百屋の半兵衛、元は遠州濱松にて山脇三左衛門が忰なる武士の面影を留めし俠義なる者が、『義ひ親にさんもつかず、在所の親の意恨もなく、ゑゝ流石じや見事に死んだ。』てふ名を取んが爲に卯月六日の朝露と消えしは其筈なるべく、放蕩無頼の河内屋與兵衛さへ、彼が友達投させ見て居ぬ氣質は、遂に『金拂ふて男立ねばならぬ』が爲に平生の心立人に優れたりし豐島屋の女房を害するに至りたるにあらずや。

正直孝行の小町屋惣七が仲間に入れば家の大事命の仇、いやと云へば小女郎を人手に渡すのみならず、命迄も取らるべき危急に際し、遂に海賊の群に入りたるは、愛の成功に對する希望に伴ふに其生存と虚榮との希望を以てしたるが爲にあらずや。氣の弱い傘屋與兵衛が讓狀取り出しゝは、財産の横奪を氣遣ひたるが爲にあらずや。『槍の權三は伊達者でござる。油壺から出すような男、しんとろとろりと見とれる男。どうでも權三よい男、花の枝から溢れる男、しんとろとろりと見とれる男。』と歌はれし笹野權三が、瓜田の履の嫌疑を避けずして遂に思はぬ難に名を流し命を果すに至りたるものは、茶の湯の名を取らんが爲に蜜子傳授書を見んとしたるによるにあらずや。氣

弱の若者二郎兵衛も、眞直な旦那殿のお心の蔑視が首切るゝより悲しきが爲に其死を恐れざりしにあらずや。千三百石の武士たりし伊達の與作も、其愛するものゝ危難を救はんが爲に貨財を得るの急なるや、自ら博奕打の大將となり他の小童を窃盗に教唆したるにあらずや。欺瞞に逢ひたる紺屋の徳兵衛は、『此徳兵衛が正直の心の底のすゝしさは、三日を過ごさず大坂中へ申し分けして見せふ。』と叫びたるにあらずや。

而して其例外なるものに至ては、名を惜み義に勇めるお乳の人重の井のあるが如く、身を其妻に是れ托する意氣地なき勝次郎あるが如く、固より女性にして却て男性的なるものもあるなり。固より男性にして却て女性的なるものもあるなり。

去れども勢譽の男性に於けるはよし其愛情の力あるに及ばざることゝ

親として勢譽に動かさるゝ例

ありとするも、猶人生の最大動機として之を女性の勢譽に於けるに比するに、『男は世間大事』として一層大に其力を逞ふするものなることゝ、蓋し其性情境遇の然ればなるべし。

若し夫れ人の父としては『盗みする子は憎からで、縄かける人が恨めしい。』との俚語に同意し、『久離切た親子なれば、能いに付悪いに付搦はぬ事とは言ひながら、大坂へ養子に往て利發で器用で身を持て身氏も仕上たあの様な子を勘當した孫右衛門は白痴もの阿房者と言はれても、其嬉しさはどふあらふ。今にも捜し出され縄かゝつて引るゝ時、孫右衛門は出かした仕合じやと賛られても、其悲しさはどふ有ふ。今から思ひ過されて、一日も先に往生させて下されと拜み願ふは、今參る如來樣御開山。佛に嘘は吐かぬぞ。』と言ひたりし忠兵衛が父孫右衛門も、『一寸顔でも見たいが、いや〳〵夫では世間が立たぬ。』

とて遂に父子相見ることを肯ぜざりしに非ずや。泰然として『侍の子は侍の親が育てゝ、武士の道を敎ふる故に武士となり、町人の子は町人の親が育てゝ、商買の道を敎ふる故に商人となる。侍は利德を捨て名を求め、町人は名を捨て利德をとり金銀を貯る。是が道と申すもの。如何なる大病難病も病には療治樣々あり。國法でとるらゝ命には入參で行水させてもいかなゝ〳〵助からねども金銀では助かる。命の買はるゝ金銀、大事の寶といふことを與次兵衛めが知つたれば、此の難儀は仕出さぬ。なんぼう惜み貯へても死んでは帷子一枚とは此淨閑も知つたれども、死ぬる迄金銀を神佛と尊ぶ。是が町人の天の道。金の爵の當つた奴、まだ此上に惜げもなふ金出して如何なる天罰大難にかな遭ふろかと、可愛ひ程猶出しかねる。吝い名をとる此淨閑。金銀計り惜むでなし。塵埃まで惜い物、たつた一人の世忰が命惜ふなふて何とせふ。』といひつゝ、內證は手を入れて二百兩まで扱ひ、已むなくんば自ら代りて罪せられんと欲したりし山崎與次兵衛の父淨閑も、七十になる淨閑がもがられたと云ふ外聞を恐れたるにあらずや。『誠の慈慈の味ひを呑みて知れ。』とて、大皿に酒にはあらで麹の色、花の壹歩のから〳〵〳〵と皿堆く盛りたる五兵衛は、日頃たしみの長脇差を『身が腹へ突込で、一つ屋の五兵衛が一分立て見せう。』と怒りたるにあらずや。亦以て愛の力の大なると共に、勢譽の力も決して蔑視すべきものにあらざるを見るべし。

『かげを隱すは母の慈悲、打つ杖は父の慈悲』

而して「昔暦」のおさんが暗中其老父を認めて『なふとつ樣かいの。』と走寄るや、『やい畜生に父樣と云はるゝ覺へはないわいや。』とわつと泣く〳〵振り上げて撲んともがく杖の下に、母はあこがれ火を吹き消し、嫁を袖におしかこひつゝ、『なふおやぢどのおさんめは逃ました。』も

親の愛は兩性の愛より理性に富む

うこらへて下され。』と叫ぶに當り、彼は之を許して『かげを隱すは母の慈悲、打つ杖は父の慈悲、心かはると子や思ふ。』と稱したるを見れば、彼が親としての男性女性に對する見解は極めて明瞭なりと謂つべし。

要するに人の親としての愛は兩性間に於ける愛よりも聰明なり。兩性間に於ける愛よりも理性に富みたり。從て其勢利榮譽に對する感動は自ら稍強き者ならずんばあらず。故に小町屋惣左衛門は餘所ながら其子を責めて、『惣左衛門が子供には商賣こそ教へたれ、非道の身過する子は持たぬ。淺ましや、不便や、天道も日月も神も佛も罰はあてはなされぬど、此方から罰の下へ申りに往くとは知らぬかや。生身には餌食有。人間一人生るれば、乳房と云ふ天道の御扶持方、正直の家職勤むれば、分限相應〳〵の天の乳房が備はる。正直にない金儲け、榮耀する樣なれど、天道の乳首に離れ、三界の捨子となり、野倒死するは幾人か。猫は火燵に寢臥する、犬は土邊で物を喰へど、火燵で猫の眞似せぬは身の分量を知つた故。畜類に劣つた身の程知らず。なれの果を思はれ、不便さに腹が立つわいやい。』といへる如き知言をなし、新口村の孫右衛門は『中のよい他人より、久離切た親子の親みは世の慣。盗み騙をせふよりも、なぜ前方に內證で斯々した傾城に斯した譯の金がいると密に便宜もするならば、親はなきより親子なり、殊に母もない悴、隱居の田地を賣ても首綱は付させまい。今では世間廣ふなり、養子の母に難儀をかけ、人に損かけ、苦勞をかけ、孫右衛門が子で候とて引込で置れふか、一夜も宿も貸れふか。曾彼奴が心から、其身も狹い苦を仕をる。』との分別をなすを難しとせざりき。

子の親に對し、兄弟の相對し、朋友の相對する

子の親に對するは、例外河與の如きものを除けば、概して親の子に對するものに近く、兄弟の相對するは、治兵衛の兄として粉屋孫右衛門あり、嘉平次が弟として幾松あると共に、亦市郎右衛門が弟として善次郎の如きものあるなり。主從の相對する、二郎兵衛の主人として菱屋介五郎もあり、勝次郎の從者として新七もあると同時に、亦惣兵衛もあるなり。茂兵衛が主人に大經師以春もあるなり。刀屋の石見もあるなり。親族相對しては、河與の叔父に山本森右衛門あり。與としては佛性の八百屋伊右衛門あると共に、治兵衛が與の五左衛門あり。紺屋德兵衛が與に吉文字屋の宗德あり。而して朋友知人の間に至ては固より難波屋與兵衛の山崎與次兵衛に於ける如きものなからずと雖、油屋九平次の紺屋德兵衛に於ける、八右衛門の治兵衛に於ける、印傳屋長作の嘉平次に於ける、大經師の重手代助右

愛の動力愈薄弱にして、勢譽の動力愈厚强

衛門の茂兵衛に於ける、甚しきは但馬屋の手代源十郎勘十郎の清十郎に於ける如きものさへあるをも珍らしとせざるなり。

然らば知るべし、愛と勢譽との交渉するものに至ては、其厚薄に於て相反比例し、愛の動力愈薄弱にして勢譽の動力愈厚强となるものなることを。彼が戯曲の説明する所此くの如し。

其三　彼の女性に對する見解

女性の生命は愛なりき。男性の命運を其命運とす。愛。嫉妬の現象。其一。其二。其三。女性と勢響。母子の愛。繼母姉妹主從。愛と勢響との交渉。女性は彼の最も巧に描きたりしもの。愛と義理。

女性の生命は愛なりき

『男子は松、女子は藤。松の力で藤もはふ、男頼みに女は立つ。』とは、是れ當日女性の實境涯を歌ひたるものにあらずや。唯男頼みに女は立つ、故に女性の生命は愛なりき。

男性の命運を其命運とす

友朋輩の嫉にて犯さぬ罪の仇名を詫ち、激憤の極身を故殺犯者として見出したる清十郎の命運は、お夏が好んで自家の命運となしたる所なりしを見よ。堂島のお屋敷の急用金を官金受托消費し、地獄の上の一足飛をなしたる忠兵衛の命運は、梅川が好んで自家の命運となしたる所なりしを見よ。又紺屋徳兵衛の命運をお初が好んで其命運とし、市郎右衛門の命運をお島が好んで其命運とし、與兵衛の命運をお鶴が好んで其命運とし、嘉平次が命運をお嵯峨が好んで其命運としたるを見よ。婦人は理性よりも感情に富むものにして、其同情の力の如何に大に、愛の力の如何に強きかを知るに餘りあるべし。

嫉妬の現象

所謂『女子は我人一むきに思ひかへしのなきもの』。其愛の力の強大なる、一轉して世の最も恐るべき嫉妬の憤怒となるべきのみならず、其更に大なるものに至ては、其愛を推して其愛するものゝ愛するものに及ぶこと、おさんの小春に於ける、お雪の夕霧に於ける如きあり。

今愛の變相たる嫉妬の如何に彼に敘せられたる乎を觀察し、以て其如何に恐怖すべき力ありと認められし乎を擧ぐべし。

彼は其現實界に於けるものを敘して、「栖狩劍本地」に於ける世繼姫玲

瓏姫が同じ思ひの同じ身を同じ住家に睦ましく御歌合草結ひ悪性咄とり〳〵に亂れし髪を二面の鏡向ふ粧ひ誰が爲にかつくろい居たりしに係らず、一たび相共に書を得て他の書中の意を疑ふや、忽ちに姫御前にあられもなき落花狼藉の光景を演出するに至りたるを示しき。

其理想的なるものを叙しては、「井筒業平河内通」に於ける膾駒姫が怨靈井筒姫を苦むるを狀し、『たゝ變らじと一筋にねてもさめてもいとしさの餘りてもれて憎ふなる。君と我とは戀中なれど、憎くや井筒が水さしてあだに破りし戀衣。』と思ひ込みし一念、

此一念は附添ひて退かじ離れじ。影身に纏ひ、くる〳〵〳〵。くるしき胸のほむらの火に五躰を焦せば、井筒姫追離れんと駈け出し、櫻の木影に隱るれば、たぶさを取て引もどし、もとより色ある花の顔、情の櫻散もせで花の木影に隱るゝは、姿は櫻の色添へてうつろふ人に思はれんと、其花心恨有。見るも餘所目の嫉ましきに、花のうはなりこれ見よ〳〵。櫻の下枝しもとゝ振り上追立ほつ立追廻し、彼岸櫻の雪と散れ、煙となれや塩釜櫻、汝に恨八重一重、けふ九重の遲櫻、君に先立初櫻、名殘も跡に有明櫻、打共去らじ退くまじ家の犬櫻、因果のほのほ火櫻の花も命も盛り一時、根に歸れと、いかみかゝれば、井筒姫逃るにとほうなく〳〵も命をつなぐ藤かづら松にまとふを力にて漸梢にはいあがれば、いづくまでもと呼つて虚空をにらみ大地を蹴立、松のこぼくに寄るよと見へし。廿尋餘の花田の帶、頭は憤怒の鬼女となり、角を振り立梢をまとひ、花を吹き捲くはやち風、砂を飛ばする土煙、猛火を吹かけ井筒をめがけ梢遙に追のぼすは凄じかりける勢なり。

井筒は梢めくるめき枝もしはつて氣も絶〳〵。死共鰓にかゝらじと枝を離れて眞倒大地へかつぱと飛おりれば、所こそあれおのが名の下は井筒の眞中へそこはかとなく落入りたり。つゝいて死靈もおちこちの山嶽俄に震動し、大地も裂くる計りなり。

と云ひ、或は其光怪窈冥變幻飄忽として端倪すべからざるの筆を以て「攝津國夫婦池」に於ける梅か枝白菊初雪が大淀義輝に對する怨恨を敘し、

色の山情の谷の戸を出て、鶯宿す梅が枝羅の白菊露ながら、手折ばまどふ袖の初雪。夜毎に召され朝毎の君が枕に寢亂れし其黑髮の移り香も、何故我に秋の扇と捨てられて、恨は世をも人をも思ひ思はじ、唯其一人の大淀ぢひの戀の恨の瀨となりて、濱の眞砂の盡るとも、今の涙は盡まじ。……

……猶妄執の沸返るあつい燗より飲むなら酒の、ひやつひやひ、日頃恨みの菊雪亂れて梅飛かゝり、取付き抱付き君に縋れば、なんじやの見られぬ、うはなり打たる此鐵杖は。煙管のらう〳〵、ひうろう〳〵〳〵〳〵ら、とらゝとら、とらゝゝ、煙草の、ひやとりとるろるろ、とろろるろろ、てる〳〵義輝公、あら正躰も波の皺のしらべも解けて。一筋ならぬ二筋三筋四筋に つれて、此方に靡けば彼方の恨み是れを慕へば彼處の妬み。色と酒との醉心地魂くれて茫然たり。思ひ出でたり其昔し、唐の帝三千宮蝶の宿りのさゝめ言。夫をうつしていざ爰に花の香慕ふ蝶々の、宿りし袖こそ我つまよ。おふ〳〵お手に、てんでに手折り折りける花の枝、宿りの蝶の立や霞にひら〳〵〳〵。ふるは羽色か櫻か雪か。こがれ羽思ひ羽ふうは〳〵露もこぼれてゐいころ

ところ〳〵。蝶々とまれ此枝にとまれ。ふりはへ翳し揚羽の蝶。羽を休むる大淀の柚に寢よとのしるしは是れ、此の比翼の蝶々、てうど抱合ひ寢所へ打連れ入る姿。あれを見よ。憎し妬まし、此念力の床の海、八苦の波と立隔たつて寢るとも寢させじ、添ふとも添はせじ。怒りに身を燒く身を焦す。紅梅即ち無間の炎。ぱつと燃立つ三筋の烟り姿跡なし。

……浮れ浴衣の菊の露、雛々に香ひこぼれて亂れ咲。時ならねども雪梅の、菊にまじりて色くらべ。妬み恨みを菊水の流れを汲むや大淀の淀の川瀬の水車、誰を待やらくる〳〵と、ゑいと、ゑいと、〳〵〳〵それはゑいとゑいと。庭の遣り水みづさして岩にせかるゝ谷川の破れてぞ末に逢ふ瀬なき、涙は袖に淵となり、漲り落る瀧壺の深き契りを引放し、人に汲ませず我一人淀が名に負ふ水車、廻る報を思ひ知らせん汲ませじと、呼ばる姿も猛火となつてくる〳〵〳〵、くる〳〵苦しむ火宅の車、水わきかへつて大焦熱の炎に紛れ失にけり。闇はあやなし。

老せぬや〳〵、藥の名をも菊の酒。おれと其方はみはへの菊よ、中の色香は人知らぬ。其方待つとて胡麻焚いた、菊の下葉も折り添へて、悔しや水を掬ふまじもの。花にも戀の仇敵。ませもまがきも蹈みしだく。大地俄に震動して渦卷上る猛火の焰。名のらで知れや白菊が冥途の姿現はれたり。夫れ婆婆電光の境には恨むへき人もなく、悲しむべき身にもあらざるに、如何にや汝いつか扨恨みそめけるぞや。早や黄泉に立歸れと、蚊帳に隱るゝ夏引の糸に繋ぎし玉の緒の消えもやせんと身を冷す。二世とかねたる妹脊のかたらひあだには誰が爲す業ぞや。非道の劍に此身をさかれし

其苦み、身を切る緣切る其恨み、遂かじ放れじ。つき纏はつて忘れいく〳〵、忘いくる〳〵、くるり〳〵。未來永々愛目を見せん思ひ知れ。天に登らは天津風、地に沈まば土風山風野風木枯、さ、さ、さつ〳〵さつたるはやちの風に吹立る。障子にうつる苛責の相、無明の業火黑煙り、ふすぼり渡つて其身を燒く。床はせいけん、棚は鐵城、驕慢の刄に掛けて五躰五つに切斷す。婆婆の報ひを今爰に、『あら堪へ難や。』と云ふ聲許り、殘るは篠松の風。婆果なく秋暮れて、冬も日數をふる雪に庭も梢も埋もれて、皆白妙の夕景色。君と淀とが相合傘の袖と袖。煙草戀草伽となり、煙り吹交ぜちら〳〵と、松にも雪の降り重りて氷付き、放れまいぞやいつ迄も。爰は吳山にあらねども傘の重さよ。いで傘の雪を拂はん。傾く傘の動かばこそ。すは〳〵重るぞおもたや重し。大盤石の碎け亂れて飛ぶ雪の中に、執念き初雪が中有の面影忽然としてすつくと立ち、『のう恨みを積る八寒の雪に身を埋み、大紅蓮の氷に閉ぢられ、苦み受くるも誰故ぞ。』と。天に叫び地に吐く息も白雪の亂れて姿は消失せけり。あら〳〵恐ろしあら怖や、逃行く先に又初雪が。面色變じて苦さす憤怒の顏。『共に來れ』といふならく の底に連行かん。行くも逃るも、迷ひに迷ふ衾の內、眞悲の角の枝高き梅枝爰にと梅花のほむら。此方へ向へは又白刃が眼の光は電光雷火の落來る如く、邪淫飲酒修羅道の三つの車のくるり〳〵と追廻る。義輝御聲苦しげに、『如何に大淀。汝が色に我を惑はし、我又汝を苦しむる。いつか苦患を遁れん。』と叫ひ給へば、鬼女は笞を振り上〳〵、『煩惱業火の婆婆の妄執、思ひ知らずや、腹立や。』と、聲々天地に轟けり。

と云ひき。

此くの如く愛の女性に於ける實に其生命たりと雖、勢譽の女性に於けるも亦一個の勢力なるとは言ふまでもあらざりき。不運にして三度の嫁入をなしたるお千代は、『此度の嫁入も追出さるゝに間はあるまい、忘れては島田平右衛門が娘の風下に居るな。』といへる世の謗を打消さんが爲に、半兵衛が彼女を連歸らんとして『千代も同道いさお立ちれ。』と言ふや、歸らんといふ嬉しさに親の病ひを何共云はず、『あゝ矢張り私を女房に持て下さんすか。あゝ忝い父様姉様も悦んで下さんせ。』と、はや抱帶を締直したりしにあらずや。翼る所は勢譽に於ては其男性を動かす如く大に動かさざるに引かへ、愛情に於ては其男性を動かすよりも更に次に動かす所あるを同しからずとするのみ。

而してお才の淺香市之進に於ける、お種の小倉倉九郎に於ける如きも、猶例外にはあらずして過誤なりしなり。寧ろ社會の罪なりしなり。彼女等は不慮の過失よりして其名を棄てたりと雖、其愛を棄たるにはあらざりき。夫婦の名をなさんが爲に、自ら不義の名を辭せずして、『權三が女房』、『お前は夫。あゝ〳〵忌々しい。』と縋り合ひ、『思はぬ難に名を流し、命を果すお前(權三)もいとしいはいとしいが、三人の子をなした廿年の馴染には、私しゃ代へぬぞ。』と叫びたるは、實にお才が骨髓を劈き出でたる眞情の聲なりしなり。『其御心を此年月知て愛しき我夫をそでにしての不義ではなし、夢見たやうな身の上の間に憎い奴もあれど、いへば身性の未練の死。夫の刀の先するは如何とは存ずれども、是は我身の言譯なり。免してくだされ是御覽ぜ。』と、胸を破て赤き心を血に言はせたるは實にお種が愛の叫びなりし

なり。其間秋毫の虚偽を容れず。

母子の間に於ける愛も、理に愛するよりは寧に情に愛するの傾あるは亦同じく、『勘當むや出てうせう。出され〳〵。』と擲つゝくはせつ其無頼兒を追出したりしお澤さへ、繼父德兵衛が密に贈らんと欲したる錢三百を止めて『常々に身をひつめ儉約してあいつに遣るは淵へ捨るも同然、其あまやかしが皆毒飼。』と言ひたりしに係らず、其袷の懐中より板間にくらりと落ちたは猶一把に錢五百なりき。『態と憎い顔してぶつゝたゝいつ追出すの勘當のとむごふつちふあたりしは、繼父のこなたに可愛がつてもらひたさ。まだ此上に根性の直る藥には、母が生肝を煎じて飲せといふ醫者あらば、身を八裂も厭はぬ。』とは其至情なりき。

若し夫れ恩義の高きと境遇の重きとによりて其身を男優りの地に見

出したるお乳の人重の井さへ、手を取て引出しつゝも、猶見すぼらしげなる我子の後影を見ては、『雨風雪降り夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日三日も休んで煩はぬ樣にしてたも。』とて、作病までも敎へたるを見ずや。

去れども繼母若くは姑としては、繼父若くは舅として宗德あり五左衛門あり井筒屋お花の繼父西陣の九兵衛ありたると共に、琉球屋お萬が繼母もありたり。お千代が姑として八百屋伊右衛門が妻もありたり。姉妹としてはお種の妹にお藤あり、喜平次の姉あり、河内屋與兵衛の妹おかちあり、主從として藤屋の貞法あり、大經師の家の玉ありしと雖、世爲ぞ復た此等と相同しからざるものゝなきとを保せんや。否其あること固よりなるべし。亦以て愛と勢力との對峙が、兩々反比例をなして其威力を逞ふすること、其男性に於けると異ら

女性は彼が最も巧に描たりしもの

愛と義理

ざるを見るべし。

要するに女性は彼が最も巧に描き得たりし所。人の妻として又母として幾と圓滿ならんとする紙屋おさん豐島屋お吉紺屋お辰の如き、無垢なるお夏の如き、思慮ある重の井の如き、梅花の如くなる小春の如く、櫻花の如くなる梅川の如き、寫す所各同しからずして其巧を同ふし、共に是れ千秋の盛觀たるもの。而して孰か愛を生命とするものにあらざらん。去れとも又孰か義理と鬪ひたるものにあらざらんや。彼が女性に對するの見解以て察すべきなり。

其四　彼の社會に對する見解

輕舟一棹。人は社會の指定したる命運に從はざる能はず。彼が娘に映したるは勿論元祿社會なりき。階級社會。階級社會必然の結果たる壓制の弊。壓制の嫌性。貴族社會と平民社會。榮譽を特色とす。平民社會の勢利を特色とす。榮譽の威力は下て平民にも及べり。勢利の威力は上て武士にも及べり。彼が寫したるは重に京坂の平民社會なり。江戸と京坂。生活の戰。個人に在ては愛情を重しとし、社會に在ては勢譽を重しとす。個人に在ては愛情は常に勢譽に勝ち、社會に在ては勢譽は常に愛情に勝つ。個人想を以て社會想と一致せしむるものは存し、衝突せしむるものは亡ぶ。社會を其儘に寫せり。國民の思想史。彼は必ずしも此日の社會に滿足したるにはあらざりき。

輕舟一棹中流を下る。首を回せば風光畫くが如くにして、翠壁一重雲一重。是の時に當て、眼は岸傍の春樹に着くも身は扁舟に隨て去

人は社會の指定したる命運に從はざる能はず

らさるを得ざるべし。心は岩上の雲を趁ふも身は扁舟に伴ふて下らさるを得ざるべし。

人の世に在る亦此くの如きのみ。滔々たる社會の流は古往今來人を送て未た曾て窮らず。而して人の其間に於ける、云爲萬狀竟に岸頭の雲を趁ふに過きず、舉措千種一に舟行の指向に伴ふに過ぎず。

彼が眼に映ずたるは勿論元祿社會なりき

然らば吾人が彼の人間觀を察せんと欲するに當り、個人が如何に彼の眼に映じたりし乎を講究すると共に、亦個人の命運を指定すべき社會が如何に彼の眼に映じたりし乎を講究するも無益なることにはあらさるべし。否最も切要とする所ならずんばあらず。

文學は社會の反照なり、元祿人たる彼が眼に元祿の日本社會が映じしたるは固より也。故に彼が寫し出し來りたる者は勿論封建武治の縱線的階級社會なりし也。即ち家に在ては夫妻父子主從兄弟朋友皆

階級社會

階級社會必然の結果たる壓制の弊

壓制の犠牲

貴族社會と平民社會

尊卑上下の別を以て序せられ、邦に在ては公卿武士農工商各階級を以て次第せられ、其間自ら踰ゆべからざるの縱線的距離ありき。是の故に當日の社會は限りなき壓制社會なりしなり。壓制的重力を以て其存立を維持すべく、尊者は實に卑者を所有するの權利ありしなり。上位者の命令は實に下位者の爲の法律なりしなり。然らされば焉んぞ藤五郎を刺したる吾妻にして罪なきことあらんや。然らされば焉んぞ半兵衛夫妻にして相對死するに至らんや。然らされば焉んぞ伽羅屋甚五郎の妻にして自殺し、小栗八彌にして河内屋與兵衛を宥すを得んや。

而して彼が寫し出し來りたる社會は亦自ら二大階級に別つを得べかりき。少數の公卿と多數の武士とに由て形つくられたる貴族的社會是なり。農工商雜業者に由て形つくられたる平民的社會是なり。而

貴族社會、榮譽を特色とす

平民社會、勢利を特色とす

榮譽の威力は下て平民にも及べり

して貴族的社會は則ち治者の社會なりき。平民的社會は則ち被治者の社會なりき。

唯治者の社會なりき、故に被養者の社會なりき。唯被養者の社會なりき、故に風敎の社會なりき。唯風敎の社會なりき、故に榮譽を以て其特色とするにの社會ならざる能はざりき。

唯被治者の社會なりき、故に養者の社會なりき。唯養者の社會なりき、故に生産の社會なりき。唯生産の社會なりき、故に勢利を以て其特色とするの社會ならざる能はざりき。

且つ夫れ武士社會が名節を磨勵し、死を見る歸するが如く、花は櫻人は武士として、榮譽を以て其精神とし、所謂武士道を以て彼等が間の社會想としたること、源平氏以來の養成したる所なり。故に武士道の彼等が間に於ける最大道德なりしことは勿論、其風化する所

勢利の威力は上て武士にも及べり

彼が寫したるは重に京坂の平民社會なり

江戸と京

俠武俗をなし、里巷の小民も猶耻を含んで活くるを屑とせざりき。遂に日本魂即ち武士道を以て實に日本の國粹となすに至りたりしなり。當日に於ける榮譽の威力知るべきのみ。

然れども如何に武士なればとて食はずして生存すべきものにあらず、剛や生産殖利を其本業とする農工商の平民社會に至りては、富の威力が世の太平無事と共に膨大せること甚しく、事實に於ては業に已に金是れ權の狀勢を呈したりき。亦當日に於ける勢利の威力知るべきのみ。

殊に彼が力を盡して寫したる所は重に平民社會なりしのみならず、實に京坂に於ける平民社會なりしなり。而して京坂の社會は江戸の社會と稍異にして江戸の社會より一層成熟に近き社會なりし也。

覇氣鬱勃たるは江戸の社會なり。神田見の拳は田舍武士の頭上を掠

生活の戰

個人に在てば愛情を重しとし、社會に在ては勢譽を重しとす

むるを懼れず、其誇る所は宵越の錢懷に温まらざるに在り。京坂の社會は全たき平民實業の社會なり。方に大坂が日本の金櫃を握りたる時代に當り、所謂『國法でとらるゝ命には、人參で行水させてもいかな〳〵助からねど、金銀で助かる』の秋。江戸は全國の富を吸收し來りたる武士の散財に由て生活し、今夕一錢を懷にせざるも明朝千金を一攫するを難しとせざりしも、京坂に至ては自家の腹によりて自家の口を糊せざるべからざるより、彼等が生活は勞働の結果なりき。彼等は實に生活の困難を知りたり。汗の價値を知りたり。金錢の價値を知りたり。江戸の文學者は往々に金錢を忘却して、生活を外にしたる小說を作る如きことなからざりしも、大坂の詩人たりし彼は最も意を致して人と生活との戰を畫けり。

詮し來れば、彼は個人に於ては愛情と勢譽との威力を認めて殊に其

個人に在ては愛情を重しとし、社會に在ては勢譽を重しとす

個人に在ては愛情は常に勢譽に勝ち、社會に在ては勢譽は常に愛情に勝つ

個人想を以て社會想と一致せしむるものは存し、衝突せしむるものは亡

重きを愛情の上に置きたりしも、社會に於ては愛情よりは寧ろ勢譽の有力なるを認め、中に就きて貴族の社會は榮譽を重しとし、平民の社會は勢利を重しとしたりしを知りしのみ。而して彼は亦個人に在ては愛情は常に勢譽に勝ちて、自家の存在を破壞しつゝも猶ほ且つ愛の成功を期するに係らず、社會に在ては勢譽は常に愛情に勝ちて、社會想は陸續個人想を破碎して息まざるを認めり。

自然の懷は温かき乎。社會の褥は冷酷にあらざる乎。光明なる乎。暗黑なる乎。山崎與次兵衛は町人として葛籠を出でゝ樂しき光景に包まれたれども、小倉彦九郎は武士たるの面目を以て榮譽の傷損を防がんが爲に自ら其幸福を切り裂くに至りたりき。忠兵衛の如き治兵衛の如き德兵衛の如き與兵衛の如きは皆生產社會の一人として勢利と闘て敗滅したりき。蓋し甲は社會想が個人想と相一致したりし故

なり。乙は相衝突したりし故なり。

社會を其價に寫せり

要するに彼は社會の光明なる半面をも畫きしなり。黑暗なる半面をも畫きしなり。其眼に映するが儘に社會を其在るが如くに畫きしなり。故に又其時代や、其風俗や、其習慣や、其文物や、其好尚や、其生活や、其宗教や、其思想や、其人類や、其社會や、躍々として見るべく、歷々として指すべし。以て社會史たるべく、以て國民の思想史たるべく、以て元祿日本の活歷史たるべきのみならず、亦以て人類歷史の一部たるべし。

個民の思想史

彼は必ずしも此日の社會に滿足したるにはあらざりき

而して其階級社會を罵て『侍とても貴からず、町人とても賤しからず、貴といい物は此胸一つ。』と云ひ、物七の墮落を原ねて社會の罪を錄し、お才お種おさんの過失を敘して境遇の壓制を示し、又紺屋德兵衛の死を記して主人壓制の不可を語り、お千代半兵衛お龜與兵衛の死因を檢して家庭舅姑の壓制を非とせしを見れば、顧ふに彼は唯社會を其在るが如くに寫して、勢利と榮譽との力を示めしたりしのみ。固より其社會を滿足したるにはあらざりしならん。

三都の別

〔註〕享保八年の江戸(人民)、

町數＝一六七二　家數＝一二八五七五　人數＝五三六二一〇（男＝二二五七〇〇　女＝三〇五七〇〇）

此他出家二萬六千九十七人、山伏三千七十五人、神主禰宜九百七人、座頭盲人一千十八人ありたり。

寛文五年の京都、即ち享保八年より五十九年前、

人數＝三五二三四四（男＝一八五〇八四　女＝一九五四四〇）

其宗數を別てば、天台宗一千百五十六人、眞言宗一萬四千七十二人、禪宗一萬千四十六人、淨土宗十萬二千八百八十人、法華宗八萬千七百廿四人、四本願寺派四萬千五百廿二人、東本願寺派四千二百八十六人、高

田門派八千百二十八四光寺派七千四百十八、大念佛宗九千四百八、律宗八千三百廿八、法相宗九千二百廿六八、山伏派六千五百廿三人。

寛文五年の大坂(諸大名藏屋敷及び御扶持人を除く)、

町數＝五四九 { 北組＝二四七 / 南組＝二四一 / 天滿＝六一 }

人數＝二六八七六〇 { 男一四一一三四 / 女一二七六二五 }

其宗數を別てば、天台宗八百九十二人、眞言宗八千六十二人、禪宗五千百廿八人、淨土宗十萬千四百五十七人、法華宗二萬三千七百廿二人、四本願寺派六萬六千三百七十五人、東本願寺派六萬三百廿二人、佛光寺派二千百七十八人、高田門派二百廿三人、大念佛派三百八十八人。

其五　彼の宗教道德に對する見解

道德と宗教

宗教の命令は多く道德の命令と一致す

道德と宗教。宗教の命令は多く道德の命令と一致す。佛教。彼が佛教の造詣如何。必ずしも小乘表面的道義のみの信者にはあらざらん。善惡不二の本体。聖左。体。相。有限の理。理に走るの順序。其一。境遇の理。其二。社會の理。憑恩と憑恩との苦闘。個人の存立と宇宙の使命。

人と人との關係は道德を作れり。人と自然との關係は宗教を作れり。而して人は社會に伏從すると共に社會は自然に伏從せざるべからざるを以て、宗教の命令は多く道德の命令と一致し、道德上の裁判は宗教上に於て人以上の靈力に由りて其制裁を執行せらるべしとは、是れ久しく人の信じたる所。彼が戲曲に於て歌ひたる所も概するに此の如くなりき。

彼が佛教の造詣如何

言ふまでもなく彼は其初釋氏の徒なりしなり。佛學を修めて少なからざるの得る所ありたるものなりしなり。故に彼が宗教の佛教なることは勿論なるべし。然れども彼が佛教は如何に造詣する所ありたるやは、亦考察する所なかるべからず。

彼は嘗て「一心五戒魂」を作て釋氏の五戒を歌ひたりき。彼は嘗て「遊君三世相」を作て釋氏の三世因果説を歌ひたりき。彼は又嘗て「釋迦如來誕生會」を作て釋迦の傳記を歌ひたりき。其他彼が戯曲の總ては幾んと全く佛教理の多少を歌ひ入れざるものなきなり。唯其歌ふ所の常に小乘にして大乘にあらざりしは、豈彼が全く小乘の信者なりしに由れる乎。抑文化の階級低き社會を教ふるが爲めに故らに小乘に就きたりし乎。將た小乘信徒の社會を寫實したるが爲に大乘を歌ふに及ばざりし乎。

彼は口を開けば則小乘的に『譬へ此身躰は鳥につゝかれても、二人の魂付纏わり、地獄へも極樂へも連立て下さんせ』。『をゝ夫よ〳〵、此身躰は、地水火風死ぬれば空に歸る。五生七生朽せぬ夫婦の魂離れぬ嶮合點。』と歌たりき。又『互に生れかはつたら、本妻定めぬ其先に早ふ夫婦に成りませう。』と歌たりき。然れども彼は三世極樂後生の説を解して、『後生と云て何所に在箸がない。さあ其有る所云ふ見よ。』と問ふに答へ、『いや云ふ迄もない鼻の先に後生がぶらついて有る、知りやらぬか。昨日は先生、今日は此世、明日は來世。一日でいふ時は今朝は先生、今は此世、晩は來世。明日する仕事を今宵の中に仕舞て、人の仕事も手傳すれば朋輩は悦ぶ、御主樣には譽らるゝ、朝もゆるりと寢らるゝ。爰が佛、極樂世界じやあるまいか。又のらかはいてしべい役をほからかし、つい其日は暮て、來翌は朝とふから叩

必ずしも小乘表面的意義のみの信者にはあらざらん

き起され、昨日の仕事を仕舞とすれば、今日の役はつかへて來る。叱られ廻て物そこない、何故破つたとて頭をくはん、性我で御座ると云ひ分すれば、まだ口答しをるかと握り拳が棒になる。夫からがちみの攻め、嚙でも嘆でも昨日が今日に歸らぬは、何と後生と云事あるまいか。』と言ふを見れば、必ずしも小乘表面的意義のみの信者にあらざりしを知るべし。

菜摘水汲難行苦行。青山は青く、白雲は白し、汝が水は水にあらず、古鄉の妻子の影を寫せし愛着の洗汁、月宿れば月を汲み、山寫れば山を汲、山月を盗む偷盗罪、六十棒のうたるゝ杖はうたれて知りし彼。迷へば佛敵、覺れば味方、豈善惡不二の本躰を知らざりしものならんや。顧ふに亦宇宙の躰として大乘の理を知り、宇宙の相として小乘の說に由りたる一人にはあらざる乎。

善惡不二の本躰

瞎左

躰

其自覺せると否とは暫く置き、眞理の本躰に對して善惡不二の思想を懷きたることは、假令ひ彼が遺硯にして近松半二が得たりしものゝ蓋には李笠翁が戲曲「玉搔頭」の序に題したりし『事取凡近、而義發勸懲。』の句を漆書せしにもせよ、其著作は悉く善惡の事跡を以て充たさるゝにもせよ、善く其社會戲曲を讀むものは必ずや之を知るを難しとせざる所なるべし。

看よ、彼が寫したる善人は果して先天より特命せられたる善人なる乎。彼が寫したる惡人は果して全たき心身を惡に由て作られたるものなる乎。善人必ずしも都ての時に善をなさず、惡人必ずしも都ての時に惡をなさゝるものは、善惡は躰にあらずして相なることを知りたるに由るに非ずや。

躰の質は特對なり。特對なるが故に唯一なり。否、無なり。

相

有限の罪

有なれば則ち相對なり。唯相對なるが故に光明あり暗黑あり、而して美あり媿あり、善あり惡あり、是れ相のみ。

是の故に彼は以て人を善ならしむべく以て人を惡ならしむへき因緣を求めて境遇の罪を鳴らせり。社會の罪を鳴らせり。又人其物の罪をも鳴せり、即ち其氣質の罪をも鳴せり。然れども其所謂罪なるものは、氣質の惡なるが故にあらず、又善なるが故にもあらず、即ち人の善たり惡たるが故にあらず、社會の善たり惡たるが故にもあらず、或は境遇の善たり惡たるが故にもあらずして、其有限なるが爲なりとなせなり。言ひ換れば有限を以て無限に從はんとするが爲めなりとなせるなり。所謂義理の由て生ずる所なり。

今試にこゝに彼が敘する所の一二を摘出し、而して其罪に走るの順序を察し、以て善惡本と不二にして竟に二なるの因由を考ふべし。

罪に走るの順序

其一

顧ふに彼女と彦九郎とは樣子ある夫婦故、姻婚の時の嬉しげさ譬へん方なかりしのみならず、『去年六月の江戸立に、「又來年の五月に暇供して下る迄は逢れぬぞや、無事で居よ、よふ留守せよ。」との貌つきが、目にちら〳〵と見るやうでほんに忘るゝ隙もない。平常戀して居る樣』なりと稱し、良人の歸來を因幡の山の峰におふるまつに衣手張りかけて待ちに待ちたりしお種が、自ら其有夫姦者たる彼女を非常なる駭きと怖れとを以て見出すに至りたるは何故ぞ。

彼女は夫の留守の敎育を誇らんが爲に一子文六の鼓の師匠宮地源右衛門を敬し且つ感謝の意を含で彼をもてなしたりしのみ。而して下女が心得て酒肴取揃へて出るや、酒好きなる彼女は其機轉を稱し、『お燗を見て。』と引受けしが、遂に罪に走るの門出となりぬ。

彼女は醉へり。同じ家中の合役人磯邊床右衛門が來りて彼女に戲れ

且つ脅迫するや、彼女は身の毛も立ちて慄ひ怖れ、『よし御承引なきからはこなたと爰で刺違へ、上方に流行る心中と國中に沙汰をさせ、俱に耻を晒さん。』と言ふを聞き、犬死と言ひ無き名を取も口惜しきが爲め、彼女は誑て『扨も嬉しき御心底何して無下に致すべき。されば共爰は親の家今戻られては如何なり。明日の夜にても我等が内へ窃と忍んで下されなば、打解け思ひ晴そう。』と告げり。而して源右衛門が之を漏れ聞くや、彼女は『欺して云ふとはそも知らず、心の蔵しみ許りかは。家中一ばいする人の世間の沙汰を如何せん。』と恐れたりき。

彼女は泣て彼に他言せざらんことを請へり。而して彼が歸らんとするを『此分で去せては私心落付ず。』とて、云まいとある固めの盃を勧めり。彼女も酌めり。而して彼女は大に醉へり。遂に其失言を覆は

んが爲に彼女は心にもなき罪に陷り畢りぬ。

本是れ物やはらかで屹として姿なら面躰なら京のどなたの奥様にも誰か否とは因幡山の國育ちとは思はれざる者。好し酒好きの弱點あればとて、其境遇にして斯る危險の事情を以て充たすにあらざりせば、何ぞ遽に罪に陷落すると此く如くならんや。

或は僅かに十兩十五兩儲けてさへ吹聽して其親を悦ばせたりし小町屋物七が、大膽にも海賊となりすまして、博多の傾城を請出し、心清町に檜の木作り節なしの見世を張り、風躰は無人の暮しでも内證は榮耀の千貫目持となりたりしは何故ぞ。

彼は沖津汐風下の閑の舟の中にて眞倒にずんでんどう、どうと響く涙音に捲りかけし大勢によりてほとりも知らぬ海の中に打込まれ、はつと心付きて見れば傳馬の中々に物音せは恐しかりなんと覺とい

て悪魚毒蛇の口を遁れ、身につくものは手足より外には何のあてもなく博多へ憧れ若き、小女郎が情忘られず、戀しき風の吹立る柳町に來り、金銀なければ肩すぼりものれと心奥田屋の門を覗いて幸に小女郎の走り出るに逢ひて誘入れられ、恐怖と歡喜とに撲れて彼が心は已に痺痲したりし時、何事ぞ座敷の隔ては障子一重の彼方の騷き、金銀財寶塵ほこりの如し。『來月は筑後の客が私を請出すと出口の佐渡屋とうす約束、お前の下りを月よ星よと待ち受たりやこんな首尾。人手へ渡れば私や生きて居ぬぞや。金借つたとて返却せば恥にもならぬ事。』といふ小女郎にひかれて障子押開け立ち出れば、何ぞ料らん隣室の大々盡とは彼を海底深く投込みたりし海賊ならんとは。

賊の親方毛剃九右衛門は『騒ぐまい〳〵。』とて彼に語れり。『これ若い

人、物七殿。此中の事一言云ふても物がないぞおつしやるな。此方共の商賣云ずとも見られた通り。何事も身が大事と思ふから、此中の事堪へさしやれ。いやと言はしやりや事に成る。や堪へさしやれ。小女郎を此方へ請出すと此方の詞が反古になり、小女郎も可愛やとなた〳〵と心中を立て通し、女郎の口から金貸せと迄恥を捨てゝの志、無にしてやらしやるは夫やいかひ邪見。悪い事は云ふまい、こちの仲間へ入らしやれ。小女郎も此方に添せ、五十貫や百貫目の金は取り換へて、親御の息がかゝらずとも物の美事に取立てましよ。仲間が多くなる程此方は損なれど、運を力にする商賣運弱ふては埒明かぬ。此中の樣な塲を免れた命冥加な運つよい此方、九右衛門が力になる人と見てこれ手を下げる。仲間へ入てくだされ。』と。詞は下げても居合腰、いやと云はゝ切かけんづ氣色は面に見へすい

たる此の瞬間、惣七も手詰の返事。『仲間へ入れば家の大事命の仇。いやと云へば小女郎を人手に渡すのみならず命迄も取らるゝ。いづれの道にも死ぬる命。國法をや慎むべき、小女郎にや添ふへき。』二つの心身一つに定めかねたるも理りならずや。

小女郎は助言すらく、『申是れ惣七様。彼方の商賣は知らぬが、駕籠に乘る人駕籠舁く人、品はかはれど行く道は同じこと。金も取かへ何から何まで世話やかふとの心入、お身に悪い事でもなし。あいといふて仲間になり、早う私と起臥を一所にしようと思はぬか。お爲にならぬ筋ならばいやと返事を云切しやんせ。こなさんに添れねば生て居る小女郎じやない。女房にしなと殺しなといやかおふかゝ生死の大事の返事でござんする。急く事はないぞや。』と。彼女は彼が懐に手を差し入れ、『おゝ此汗はい。』と鼻紙有たけ拭捨る。濡れて破るゝ人の身のたしなみ難き道は忽ちに彼が決心を促しぬ。『得心致した。只今より仲間になり御指圖は背くまい』。

彼は遂に此くの如くして恐ろしき罪悪の淵に沈みたりき。若し社會にして奸悪の徒を養はず、彼をして斯る猛毒なる誘脅の中に陥らしめさりせば、安ぞ正直孝行なる彼にして是に至ることあらんや。

罪に走るの道途は嶮夷同しからざれども、多くは此の如きのみ。善悪多くは世途の通塞に由て作らる。皓々たる素絲以て玄にすへきなり。以て黄にすべきなり。

然れども一たび罪を擇べば、罪を擇びたるの意思は一方に其道徳を信ずるの意思と苦闘せざるを得ず。道徳を信ずるの意思は社會共同の中心に向はんとするの意思なり。從て宇宙共同の中心に向はんとするの意思なり。

社會の罪

意思と意思との苦闘

顧ふに人に二個の意思あるは、一方に其個人の存立を保たざるべからざればなるべし。一方に宇宙の大中心に向て進むへき使命を帶びたればなるべし。

結論　彼は多くの類似に於て日本の沙翁（シエーキスピア）なり

功名骨と共に朽るもの何そ限らん。彼か遺著には永久の少時あり。人生の活ける縮圖。思想界の大滝澤。社會に留めたる効果。彼と馬琴。彼と四鶴。出雲、半二。千古の人生詩人。彼は多くの類似に於て日本のシエーキスピアなり。

首を回せば悠々たり二千餘年、無數の英雄は歴史の星坐を繞りて燦として恒河の砂の若し。輕裘肥馬一世に誇り富王侯に擬し貴き相將として、而も時勢と相渉らず、畢生の勳業徒らに骨と共に朽ちたりしもの何そ曾て一二のみならんや。

然るに彼が如きは一個の逸民として生れ一個の逸民として死し生て赫々の功なく死して嘖々の名なきに係らず、其遺著の世に在る、恰も千古の色を反覆して朝々人に對する芙蓉峯頭の雪の如く常に故く

人生の活ける縮圖

思想界の大潴澤

して又常に新らしきものは何ぞや。彼れが遺著には永久の少時あればなり。

彼が遺著の或ものは寔に人生の活ける縮圖なりき。啻に當日の日本人が其中に温かき血を有するのみならず、人類の温かき血の幾滴は長へに其中に在りて小宇宙を形つくらんとするなり。人類の温かき血には永久の生命あり。永久の生命を住めたるものには永久の少時なくんばあらず。

蓋し彼は現實界に在りては固より山間の一木一草のみ、在るも以て其翠色を添ふるに足らず、在らざるも以て其翠色を減ずるに足らざるものなりしと雖、其思想界に於けるや一大潴澤にして、日本思想の流は實に彼に匯められ、而して實に彼に由りて新に國民の間に分配せられたるもの極めて多し。彼が歌ひたりし武士道が如何に國民

社會に留めたる効果

を一種の武士となしたりしよ。彼が歌ひたりし大なる愛が如何に國民の愛を高からしめしよ。

其感化力の大なる、彼が木偶劇場の詩人なりしが爲めに、日本の演劇は木偶的となりしにあらずや。彼が情死を歌ひたるが爲めに、情死は一種の流行となりしにあらずや。

蓋し彼が戯曲の或るものは猶心なき一泓の水の如く、何人の理想の影も其中に見出され、解釋する人の解釋するがまゝに解釋せらるゝを以て、或は此くの如きの好ましからざる感化を與へたりしことも亦ありき。何ぞ獨り曾根崎の狂言を好み觀て巧に油屋九平次を學ひたりし印傳屋長作のみならんや。然れどもこれと同時に知らず識らずの間に國民の道德を非常なる高位地に進めたりし偉勳に至ては亦決して之を没すべからざるなり。社會中層下層の多數國民にして日

相比すべき大思想家ありやら

本國民の如くに美はしき國民ある乎。此の美はしき國民にして直接若くは間接に彼が戲曲の敎育を受けさるものある乎。

又試に歷史を上下して我邦に彼と相比すへき大思想家の尙ありやあらずやを見よ。何人か是れ彼に並ぶべき思想を有したりしものぞ。何人か是れ彼に並ぶべき効果を世に留めたりしものぞ。

彼と馬琴

日本の大思想家として時勢と相涉れるもの固より少なからず。然れども最近三百年の思想界に於て其國民に直接なるものを擧ぐれば、前に元祿に於ける彼より大なるものはあらざるべし。後に寛政に於ける瀧澤馬琴より大なるものはあらざるべし。而して馬琴は必ず英雄豪傑萬馬千軍を材とし、最大の天地に於て最大の運動を寫さんと期せり。其の結搆大は則ち大なれども之が靈池を射るの効果に至ては、往々に池面一片の秋葉を點したるに過ぎざるとあるにあらずや。

彼と西鶴

出雲、半二

彼に至ては匹婦匹夫を材とし、書く所は日常平凡の事にして、唯一小石を把て之を其靈池に投じたるのみ。然れども彼が投じたる石は緊しく池心を射て大魚を驚かし、全池之が爲に覆翻するにあらずや。彼と幾と其時を同ふして常に樂天的筆法を用ひ、以て社會の反面を畫き人類の弱點を畫きたりし井原西鶴の如きも、其思想の妙用は遠く馬琴に過ぎ、社會人類の缺陷を嘲笑する技倆に至ては、或は彼にも勝りたる所あるべしと雖、彼が善をも畫き惡をも畫き社會の光明なる半面をも暗黑なる半面をも畫き悲をも畫き喜をも畫くの大成したるには如かざりき。

而して彼に次て同じく戲曲の著作を事としたりし竹田出雲、近松半二等に至ては、固より是れ彼が弟子のみ。幕府の連歌師長島曇齋嘗て言へりき、『近松は此道の聖なり。出雲は亞聖なり。半二は大賢と

千古の人生詩人

稱すべし。』と。亦軒輊し得たる哉。

＊　＊　＊

論じ去り論じ來てこゝに考一考す。吾人は竟に彼が千古の人生詩人として、日本二千餘年の大思想家たるをいなむ能はざるなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

彼は彼が時代に於てシエーキスピアがシエーキスピアの時代に於けるに似たり。彼は彼が劇場詩人たりし生涯に於てシエーキスピア劇場詩人たりし生涯に似たり。彼は彼が國民に贈りたる効果に於てシエーキスピアがシエーキスピアの國民に贈りたる効果に似たり。彼は彼が詩人としての位地に於てシエーキスピアが詩人としての位地に似たり。彼は彼が天才に於てシエーキスピアが天才に似たり。彼は彼が豐富なる詞才に於てシエーキスピアが豐富なる詞才に似たり。彼は彼が小造化的思想家たるに於てシエーキスピアが小造化的思想家たるに似たり。

彼は多くの類似に於て日本のシエーキスピアなり

吾人は唯似たりと謂ふ、固より同しとは謂はず。然れども彼は多くの類似に於て實に日本のシエーキスピアなり。

井原西鶴

〔註〕井原西鶴、西山宗因に學びて談林の俳諧を善くし、松露軒と稱す。浪華の人なり。初め鶴永と稱し、晩年西鶴とあらため、又曾て住吉社頭に二萬三千句を獨吟して二萬翁とも號しき。

著す所「一代男」「二代男」「三代男」「一代女」「五人女」「男色大鑑」「三千本孝」「日本永代藏」「武道傳來記」「文反古」「西鶴置土産」「武家義理物語」「織留」「本朝櫻陰秘事」「諸國はなし」「世間胸算用」「大矢數」「後大矢數」「三目玉

錄」「石車」「胴骨」「兩吟千句」「好色盛衰記」其他にて、俳書十餘卷浮世草子二十餘卷あり。

寛永十九年に生れ年五十二にて元祿六年八月十日歿す。墓は大坂八丁目寺町醫願寺にありと云ふ。

辭世、

人間五十年の究り、それさへ我にはあまりたるに、ましてや、

浮世の月見過しにけり末二年。

瀧澤馬琴名は解、通稱は瑣吉、曲亭といひ、著作堂蔬笠隱居等と別號す。第十世將軍の明和四年江戸深川に生れ、十二世將軍の嘉永元年十一月六日に病歿す。年八十二。小石川茗荷谷深光寺に葬る。

彼强記弘覽、精力比なし。其著「里見八犬傳」「椿說弓張月」「朝比奈巡島記」「俠客傳」「美少年錄」「南柯夢」を始め、刊行したるものゝみにても、二百九十餘種の多きに及べり。

近松門左衛門 終

附錄

近松門左衛門著作表

題名	著作の性質	作者の年齢	最初の上場地	最初の上場者	最初の上場歲月 日本曆	最初の上場歲月 四曆
徒然草	史的戲曲	未詳	京都	宇治加賀掾（嘉太夫）	未詳	未詳
世繼曾我	史的戲曲	未詳	京都（作者在京都）	宇治加賀掾	未詳	未詳
天皷	史的戲曲	廿二歲前	大坂	井上播磨掾	貞享二年前	千六百八十五年前
一心五戒魂（復烏羽繼塚）	史的戲曲	未詳	京都	宇治加賀掾	未詳	未詳
主馬判官盛久	史的戲曲	未詳	京都	宇治加賀掾	未詳	未詳
國扇曾我（百日曾我）	史的戲曲（石川五右衛門の脚色）	未詳	京都	宇治加賀掾	未詳	未詳
遊君三世相	史的戲曲	未詳	京都	宇治加賀掾	未詳	未詳
賴朝七騎落	史的戲曲	廿二歲前	大坂	井上播磨掾	貞享二年前	千六百八十五年前

出世景清	史的戲曲	三十四歲	大坂	竹本筑後掾（義太夫）	貞享三年二月四日	千六百八十六年
佐々木大鑑	史的戲曲	三十四歲	大坂	竹本筑後掾	貞享三年七月十五日	千六百八十六年
源氏冷泉節	史的戲曲	三十六歲	大坂	竹本筑後掾	元祿元年正月二日	千六百八十八年
天智天皇	史的戲曲	三十七歲	大坂	竹本筑後掾	元祿二年三月三日	千六百八十九年
源氏十二段	史的戲曲	三十八歲	大坂	竹本筑後掾	元祿三年三月三日	千六百九十年
新本領曾我	史的戲曲	四十一歲	大坂（以下作者在大坂）	竹本筑後掾	元祿六年五月六日	千六百九十三年
松風村雨束帶鑑	史的戲曲	四十二歲	大坂	竹本筑後掾	元祿七年三月三日	千六百九十四年
釋迦如來誕生會	史的戲曲	四十三歲	大坂	竹本筑後掾	元祿八年四月八日	千六百九十五年
鎌田兵衛名所鑑	史的戲曲	四十三歲	大坂	竹本筑後掾	元祿八年十月十二日	千六百九十五年
今樣小栗判官	史的戲曲	四十六歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十一年二月十四日	千六百九十八年
源氏烏帽子折	史的戲曲	四十七歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十二年正月二日	千六百九十九年
浦島年代記	史的戲曲	四十八歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十三年正月六日	千七百年

長町女腹切	社會的戲曲	四十八歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十三年正月六日	千七百年
淀鯉出世瀧德	社會的戲曲	四十八歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十三年四月八日	千七百年
蟬丸	史的戲曲	四十九歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十四年五月六日	千七百一年
大掛物十幅對	史的戲曲	四十九歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十四年九月九日	千七百一年
曾我五人兄弟	史的戲曲	四十九歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十四年十一月朔日	千七百一年
大磯虎稚物語	史的戲曲	五十歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十五年五月二十八日	千七百二年
加古敎七墓巡	史的戲曲	五十歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十五年七月十五日	千七百二年
最明寺殿百人上臈	史的戲曲	五十一歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十六年三月四日	千七百三年
曾根崎心中	社會的戲曲	五十一歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十六年五月七日	千七百三年
源五兵衛（おまん）薩摩歌	社會的戲曲	五十二歲	大坂	竹本筑後掾	元祿十七年正月十五日	千七百四年
甲賀三郎	史的戲曲	五十二歲	大坂	竹本筑後掾	寶永元年四月十六日	千七百四年
（おふさ）德兵衛心中重井筒	社會的戲曲	五十二歲	大坂	竹本筑後掾	寶永元年四月十六日	千七百四年

用明天皇職人鑑	史的戲曲	五十三歲	大坂	竹本筑後掾	寶永二年三月二日	千七百五年
雪女五枚羽子板	史的戲曲	五十三歲	大坂	竹本筑後掾	寶永二年七月十四日	千七百五年
傾城反魂香	史的戲曲	五十三歲	大坂	竹本筑後掾	寶永二年八月十五日	千七百五年
源義經將棊經	史的戲曲	五十四歲	大坂	竹本筑後掾	寶永三年正月廿五日	千七百六年
心中二枚繪草紙	社會的戲曲	五十四歲	大坂	竹本筑後掾	寶永三年三月廿七日	千七百六年
兼好法師物見車	史的戲曲	五十四歲	大坂	竹本筑後掾	寶永三年五月五日	千七百六年
碁盤太平記	史的戲曲	五十四歲	大坂	竹本筑後掾	寶永三年六月朔日	千七百六年
同跡追一段物	史的戲曲	五十四歲	大坂	竹本筑後掾	寶永三年六月朔日	千七百六年
曾我扇八景	史的戲曲	五十四歲	大坂	竹本筑後掾	寶永三年七月十五日	千七百六年
おさん茂兵衛大經師昔暦	社會的戲曲	五十四歲	大坂	竹本筑後掾	寶永三年九月廿一日	千七百六年
吉野忠信	史的戲曲	五十五歲	大坂	竹本筑後掾	寶永四年正月廿日	千七百七年
堀川浪の鼓	社會的戲曲	五十五歲	大坂	竹本筑後掾	寶永四年二月十五日	千七百七年

おかめ與兵衛卯月の紅葉	社會的戲曲	五十五歲	大坂	竹本筑後掾	寶永四年四月廿一日	千七百七年
おかめ與兵衛卯月の色上	社會的戲曲	五十五歲	大坂	竹本筑後掾	寶永四年六月朔日	千七百七年
丹波與作	社會的戲曲	五十五歲	大坂	竹本筑後掾	寶永四年六月廿四日	千七百七年
酒呑童子枕言葉	史的戲曲	五十五歲	大坂	竹本筑後掾	寶永四年九月九日	千七百七年
おむめ乘之助心中萬年草	社會的戲曲	五十六歲	大坂	竹本筑後掾	寶永五年四月十六日	千七百八年
おなつ清十郎歌念佛	社會的戲曲	五十七歲	大坂	竹本筑後掾	寶永六年正月二日	千七百九年
梶狩劍本地	史的戲曲	五十七歲	大坂	竹本筑後掾	寶永六年九月九日	千七百九年
赤染衛門榮花物語	史的戲曲	五十七歲	大坂	豐竹越前少掾（若太夫）	寶永六年十月	千七百九年
曾我虎石磨	史的戲曲	五十八歲	大坂	竹本筑後掾	寶永七年正月二日	千七百十年
おさき二郎兵衛掛鯛心中	社會的戲曲	五十八歲	大坂	竹本筑後掾	寶永七年正月廿三日	千七百十年
百合若野守鏡	史的戲曲	五十八歲	大坂	竹本筑後掾	寶永七年五月六日	千七百十年
心中刃は氷の朔日	社會的戲曲	五十八歲	大坂	竹本筑後掾	寶永七年六月十六日	千七百十年

夕霧阿波鳴戸	社會的戲曲	五十八歲	大坂	竹本筑後掾	寶永七年七月廿四日	千七百十年
本朝五翠殿	史的戲曲	五十九歲	大坂	豐竹越前少掾	寶永八年正月	千七百十一年
梅川忠兵衛冥途飛脚	社會的戲曲	五十九歲	大坂	竹本筑後掾	寶永八年三月五日	千七百十一年
吉野都女楠	史的戲曲	五十九歲	大坂	竹本筑後掾	正德元年九月十日	千七百十一年
傾城掛物語	史的戲曲	六十歲	大坂	竹本筑後掾	正德二年三月四日	千七百十二年
弘徽殿鵜羽產家	史的戲曲	六十歲	大坂	竹本筑後掾	正德二年五月五日	千七百十二年
嫗山姥	史的戲曲	六十歲	大坂	竹本筑後掾	正德二年七月十五日	千七百十二年
傾城吉岡染	史的戲曲	六十歲	大坂	竹本筑後掾	正德二年十一月二日	千七百十二年
天神記	史的戲曲	六十一歲	大坂	竹本筑後掾	正德三年二月廿五日	千七百十三年
孕常盤	史的戲曲	六十一歲	大坂	竹本筑後掾	正德三年七月十六日	千七百十三年
新撰大職冠	史的戲曲	六十一歲	大坂	竹本筑後掾	正德三年十一月朔日	千七百十三年
相模入道千匹犬	史的戲曲	六十二歲	大坂	竹本筑後掾	正德四年四月八日	千七百十四年

瀧口横笛娥歌加留多	史的戲曲	六十二歲	大坂	竹本筑後掾	正德四年八月朔日	千七百十四年
嵯峨天皇甘露雨	史的戲曲	六十三歲	大坂	竹本弟子	正德四年十月十五日	千七百十四年
二人静胎内探	史的戲曲	六十三歲	大坂	竹本弟子	正德五年正月二日	千七百十五年
持統天皇歌軍法	史的戲曲	六十三歲	大坂	竹本弟子	正德五年八月朔日	千七百十五年
おさが嘉平次生玉心中	社會的戲曲	六十三歲	大坂	竹本弟子	正德五年八月	千七百十五年
國姓爺合戰	史的戲曲	六十三歲	大坂	竹本弟子	正德五年十月朔日	千七百十五年
國姓爺後日合戰	史的戲曲	六十五歲	大坂	竹本弟子	享保二年二月	千七百十七年
鎗權三重帷子	社會的戲曲	六十五歲	大坂	竹本弟子	享保二年八月廿二日	千七百十七年
聖德太子繪傳記	史的戲曲	六十五歲	大坂	竹本弟子	享保二年十一月十六日	千七百十七年
山崎與次兵衛壽の門松	社會的戲曲	六十六歲	大坂	竹本弟子	享保三年正月二日	千七百十八年
日本振袖始	史的戲曲	六十六歲	大坂	竹本弟子	享保三年二月廿二日	千七百十八年
曾我會稽山	史的戲曲	六十六歲	大坂	竹本弟子	享保三年七月十五日	千七百十八年

日蓮上人記	史的戲曲	六十六歲	大坂	竹本弟子	享保三年十月十二日	千七百十八年
傾城酒呑童子	史的戲曲	六十六歲	大坂	竹本弟子	享保三年十月廿五日	千七百十八年
博多小女郎浪枕	社會的戲曲	六十六歲	大坂	竹本弟子	享保三年十一月廿日	千七百十八年
本朝三國志	史的戲曲	六十七歲	大坂	竹本弟子	享保四年二月十四日	千七百十九年
平家女護島	史的戲曲	六十七歲	大坂	竹本弟子	享保四年八月十二日	千七百十九年
島原蛙合戰	史的戲曲	六十七歲	大坂	竹本弟子	享保四年十一月六日	千七百十九年
河內通（井筒梁平）	史的戲曲	六十八歲	大坂	竹本弟子	享保五年三月三日	千七百二十年
雙子隅田川	史的戲曲	六十八歲	大坂	竹本弟子	享保五年八月三日	千七百二十年
日本武尊東鑑	史的戲曲	六十八歲	大坂	竹本弟子	享保五年十一月四日	千七百二十年
心中天網島（小はる治兵衛）	社會的戲曲	六十八歲	大坂	竹本弟子	享保五年十二月六日	千七百二十年
攝津國夫婦池	史的戲曲	六十九歲	大坂	竹本弟子	享保六年二月十七日	千七百廿一年
女殺油地獄	社會的戲曲	六十九歲	大坂	竹本弟子	享保六年七月十五日	千七百廿一年

信州川中島合戰	史的戲曲	六十九歲	大坂	竹本弟子	享保六年八月三日	千七百廿一年
唐土斷今國姓爺	史的戲曲	七十歲	大坂	竹本弟子	享保七年正月二日	千七百廿二年
心中宵庚申	社會的戲曲	七十歲	大坂	竹本弟子	享保七年四月廿二日	千七百廿二年
關八州繫馬	史的戲曲	七十二歲	大坂	竹本弟子	享保九年正月十五日	千七百廿四年
右大將鎌倉實記	史的戲曲	七十二歲	大坂	竹本弟子	享保九年十一月四日	千七百廿四年

近松門左衛門著作一斑

世繼曾我

「世繼曾我」

土佐淨瑠理金平淨瑠理の体裁を其儘に採用して作りしものゝ中、最も喝采を博したるものなり。全劇短き六齣を以て成り、曾我兄弟の死後新開荒四郎諸將の射留めたりし鳥獸を記するに當り、御所の五郎丸が時宗を生捕りし功を錄せしとて朝比奈義秀時宗を鹿にせるかと怒り、遂に曾我の所錄のものをして二人を討たしむべしと二人を捕へ、祐成の遺子祐若本領を復すと云ふを仕組めり。中に虎少將を出して文情の波瀾を示す。極めて拙劣なるものなり。以て彼が當初の筆力の稚きを見るべく、又社會嗜好の稚きをも見るべし。

天皷

「天皷」

謠曲「天皷」より翻案し、太見の縣主時景夫妻が姪の孤女澤瀉が家の天皷を奪ひ、其女夕ばねを澤瀉に代へて盤の親王に進めんと謀り姪を惡むことを作れり。浄瑠を主とす。

一心五戒魂

「一心五戒魂」

後訂正して「復島羽戀塚」と呼びたり。僧文覺が那智の滝にて苦行し瀕絶するに及びて胸中より五色の魂飛ひ去りしとて、其五色を以て佛教の五戒に配し、蘇姫袈裟衣川源渡早瀬源内袈裟の子爲若等の人物を假り來りて文覺が一代の事を既き、遂に那智の飛瀑下に我にかへりて彼自らを見出すに結べり。全劇を五戒に分配して五段となしぬ。

團扇曾我

「團扇曾我」

石井兄弟の復讐を仕組みしものにて、本と浄瑠の爲に作りしものなりしも、竹本座に大喝采を博したりとて之を「百日曾我」と改めたりき。

海野太郎新田四郎が馬爭ひを以て起し、曾我兄弟虎少將鬼王團三郎及其妹花野父津藏の入道工藤祐經等を出し、以て二孤の復讐を畫き、馬は三度の功を以て新田の手に入り、曾我氏亦所を得るに終る。

遊君三世相

「遊君三世相」

樂人狛野左京盛光の妻一家の樂人近藤兵庫守廣忠と通し遊子春姫を惡むより生したる波瀾を寫せり。「天皷」を改作增補したるものゝ如し。

出世景清

「出世景清」

世傳ふる所大田蜀山人に添削せられて『扨も其後』の唱破辭の如き削り去られ

「天智天皇」

「源氏十二段」

「釋迦如來誕生會」

「源氏烏帽子折」

たるが多し。平清が平家の爲に頼朝を擊んと千辛萬苦し遂に伏歸するに至ることを寫し、中に跡て阿古屋が慚死及ひ彼が伏歸しての苦心の如きは最も巧に寫したりし所なりき。

天智天皇

齊明天皇位に在るに當り、二の宮葛城の大君即ち未來の天智天皇東宮に立ちしに、一の宮さかめの王子東宮を傾けて自ら代らんとし、且其情人花照姫を奪はんと謀りしが、終局の勝利は東宮に歸したることを仕組めり。

源氏十二段

源牛若鞍馬に在るより起し、其東走、常盤追て盜に遂て死し、牛若盜を斬り、矢刻に至りて淨瑠理姫に逢ひ、姫死す、等の事を叙し、義經の奥州出立に終る。

釋迦如來誕生會

釋迦の傳記を歌ひたるものなり。幡臺弼摩耶夫人姉妹の爭、誕生、之を第一齣とし。耶倫陀羅女と彼、出家、提婆追擊、之を第二齣とし。道行、殺特、之を第三齣とし。修行、成道、布教、迫害、之を第四齣とし。涅槃、之を第五齣とす。

源氏烏帽子折

常盤の流離より筆を起し、牛若京師に成入し、頼朝兵を擧るを聞て東行する顚末を叙す。彌平兵衛宗清が妻にして藤九郎盛長が妹たる白妙が常盤を救ふ段の如き見るへき所たり。

「浦島年代記」

浦島年代記

因大臣の惡、其女中帶姫女御の子眉輪安康帝を弑すること、浦島太郎久壽雷龜の助けによりて泊瀨の皇子(雄略天皇)綾織姫を護すること等を叙し、遂に浦島が龍宮に至ることに及ぶ。

「長町女腹切」

長町女腹切

彼が初めて作りたる社會戲曲なり。

三代まで榮るといへる不吉の脇差の爲に、刀屋の弟子半七が其相愛する姉婦お花を救はんとして預りし刀を賣るに至り、遂に死すべかりしに、伯母死して彼等を救へることを叙したり。

「淀鯉出世瀧德」

淀鯉出世瀧德

八幡の宮人江戸屋勝二郎茨木屋の吾妻に迷ひ、惡手代惣七の奸によりて遂に其財産を官没せらるゝに至り、吾妻は爲に殺人罪を犯すに至りたりしも、比類なき忠實なる舊從者新七夫妻兄弟の救護により目出度き大團圓に終る。

これ彼が社會戲曲の第二なり

「蟬丸」

蟬丸

蟬丸直姫の離苦を叙したるもの。北の方、ばせをの前の嫉妬、北の方の御せうと早廚の悪逆等を假り來て之を潤飾せり。

「最明寺殿百人上臈」

最明寺殿百人上臈

北條天女丸時宗を蒙經の再生とし、頼朝薦經录時の事跡に擬して時頼末年の事を寫せり。

「曾根崎心中」

曾根崎心中

彼が社會戯曲第三の作として悲壯戯曲の第一たるもの是なり。所謂心中物の初とす。

油屋の手代徳兵衛蜆川天滿屋のお初に契り、主人の妻の姪と婚するを嫌ひ、櫛母が取り去りたる二貫目の銀を主家に返して之を辭せんとせしに、油屋の九平次なるものゝ欺く所となりて、二貫目を才覺する能はず。終に相對死するに至れり。

「薩摩歌」

此作よりして彼が本領大に見るべし。

源五兵衛（おまん）薩摩歌

熊本の笹野三五兵衛親の敵を討んが爲め女裝して但馬なる其官ひなづけの妻小萬の家に在りしに、新にかゝへられし僕乃兒島の菱川源五兵衛同所琉球屋のおまんと契り、遂に落魄してこゝに來りしものなりしが、事起りて去り、事助と名を改めて琉球屋に出入し居たりしに、おまんの櫛母其からずしておまんを京の富商に嫁せしめんとし、おまん源五兵衛に走り、源五兵衛おまんの櫛母を斬らんとして誤ておまんを切り、又自ら其腹を刺したりしが、笹野三五兵衛夫妻に救はる。

西鶴の「五人女」にもお萬源五兵衛の事見ゆ。

「心中重井筒」

おふさ徳兵衛心中重井筒

紺屋の徳兵衛其愛する娼婦おふさの離を救はんとして借錢し、妻お辰の大なる愛の爲に一旦悔悟せんとしたりしも、おふさの離を傍觀するに忍びず、遂に情死するに至る。

彼が作中傑出せしものゝ一なり。

「用明天皇職人鑑」

用明天皇職人鑑

山彦の王子外道を信ず、異腹の御弟聖日花人親王（後に用明天皇）佛法を信ず。花人親王聖後の人まのゝ長者の女玉よの姫を愛しけるに、山彦の皇子之を妨げて王位を望みけるより事起る。

親王の臣五位の介諸岩の忠。妻さよ姫。先の妻の姉。さよ姫の兄兵藤太入道。及ひ母。親王の崎嶇問難。聖德太子の誕生。外道の敗。

「雪女五枚羽子板」

雪女五枚羽子板

斯波義將の臣藤内太郎家治同次郎盛治同三郎武治同四郎光治を主とし、赤松前司入道幸滿父子が義教將軍を傾けんとするの逆謀、義將の忠節を敘せり。行文流暢華麗、大に見るへし。殊に腰元中川が雪中の苦心を敘する一節の如き廻風雪を捲くの趣あり。

「傾城反魂香」

傾城反魂香

土佐の將監が女お光初め遊女となりて遠山といひしもの狩野四郎次郎元信を愛し、身千苦萬辛して變らず。元信六角左京太夫の女銀杏の前と契らざるべからざるに及び、彼女は死して猶其愛を變ぜざりき。中間ごもの又平夫婦を出して錦上花を添ふ。

「心中二枚繪卿紙」

心中二枚繪卿紙

市郎右衛門弟善次郎の爲めに陷られ、其愛する所の天滿屋のお島と情死す。善次郎悔ひしも及ばず。

「兼好法師物見車」

兼好法師物見車

高の師直後宇多の院第八の姫みこ卿の宮に掛想せしより師直の怨を傳ぜしめんが爲めに侍從をして鹽冶高貞の妻の美を說かしめ吉田の兼好爲に艷書を卿したりといふを以て起り、高貞の謀死、侍從の殺さるゝこと、鹽谷の臣八幡六郎の忠勇等を畧げたり。

「碁盤太平記」

碁盤太平記

鹽冶の臣八幡六郎即ち大星由良之助が其黨四十餘人と主人の讐高師直を殺すことを敘せり。

寺岡平右衛門の忠節、由良之助が母の氣慨盡き得て好し。

＊　＊　＊　＊

「兼好法師物見車」及ひ此の「碁盤太平記」は赤穗の義士等吉良邸に討入りし事を作りたるものにて、元祿十五年より三年を經て寶永三年に成りき。出雲の「忠臣藏」は即ち之を改作したりしもの、彼が考案に成りたる天地を足利時代に假り、高鹽冶の事に附會假托したる如き、大星由良之助等の命名の如き、後眞僞を辨ぜざるまでに人に知らるゝに至りき。

「大經師昔暦」

大經師昔暦

おさん茂兵衛

大經師以春の妻おさん貧しき其實家の爲に金錢の才覺を手代茂兵衛に托し

たるより事始まり、愛な茂兵衛に濺ぎつゝありたる侍女玉が茂兵衛の罪を分たんとせしより、玉を憎からず思ひ居たる以巻は姉姫の眼を以て彼等を見、遂に一種の過誤の爲めにおさんは茂兵衛と共にあらざるべからざるの境遇に沈み、共に走りて遂に捕へらるゝに至り、おさんが老父母の苦心によりて黒谷の東岸和尚二人を救ふ。

中に就ておさんの親道順夫妻の愛大に見るべし。

おさん茂兵衛西鶴の「五人女」にもあり。

「堀川波の鼓」

堀川波の鼓

因幡の士人小倉彦九郎江戸詰の留守、女房お種が酔ひての上の過にて失言を捲はんが爲に鼓の師匠宮地源左衛門との間に失行し、彦九郎が女敵打をなすことを作れり。

「卯月の紅葉」

卯月の紅葉

おかめ 興兵衛

傘屋の養子興兵衛男の妾今及び今の弟傳三郎の惡む所となり、妻おかめと共に對死せんとし、お鶴死して興兵衛未だ死に至らざりし事を叙せり。

「卯月の色上」

卯月の色上

「卯月の紅葉」の末期の道行を取り來て上巻とし、お鶴の伯母が彼女を追悼し、僧

となりてありたる興兵衛の追死するに至る。

「丹波與作」

丹波與作

丹波の國の一城主由留木殿のお湯殿の子しらべの姫東の高家入間殿の養子となりしも未だ稚くして東行を嫌ひしに、一小馬子の道中雙六によりて東行するに至りしを叙し、而して其小馬子實はお乳の人重の井の子なりしと說けり。重の井の夫伊達の興作は過ありて涙人し、遂に馬子となり居りしが、關の小萬と相愛し、小萬を救はんとして道ならぬ事をなすに至り、小馬子を救唆して盜をなさしめしに、小馬子は即ち其の子の興之助なりしを見出し、小萬と相搗へて死せんとしたり。而して重の井の救護によりて再び武士となる。

* * * * *

『興作丹波の馬追なれど、今はお江戸の刀さしゝや、しやんさせ興作。』といへる小唄によりて作りたるもの歟。

「酒呑童子枕言葉」

酒呑童子枕言葉

源頼光大江山に酒呑童子を退治したりといへる俗說又は謠曲「大江山」を本として作れり。

「心中萬年草」

心中萬年草

高野山女人堂

高野の小性成田久米之助神谷の宿に隠れなき雑賀屋の娘お梅と愛し、山を追はれ、相情死す。

雑賀屋が京鳥丸の簪屋作右衛門を婿とせんとせしは彼等を死に導きたる緣なりき。

「歌念佛」

おなつ清十郎　五十年忌歌念佛

但馬屋の娘お夏手代清十郎と相愛す。清十郎の友手代源十郎勘十郎嫉みて讒して其主に清十郎を追はしめしに、清十郎遂に源十郎を殺し捕へられて自死し、お夏は尼となる。

事實は四國の「五人女」にも見へたれば、當日人口に膾炙したるものなりしならん。

「梔狩劍本地」

梔狩劍本地

謡曲「紅葉狩」に基き、平維茂が寶劍平國の御太刀を尋ねて戸隠山に入ることを叙す。

「掛鯛心中」

おさき二郎兵衛　掛鯛心中

菱屋の手代二郎兵衛同し家にありたるおさきと契り、誤て主家の手形を破りて情死す。

「百合若野守鏡」

百合若大臣野守鏡

豐後の國の旗頭太宰の太郎和田丸百合若大臣と名乘りて崇古里國征伐に行くや、郎黨別府兄弟國を奪ひしに、執權府内父子の忠節により別府を滅すことを作れり。

「心中刄は氷の朔日」

心中刄は氷の朔日

播磨の一士人の女大坂の伯母の許にありしが伯母の登を救はんとして娼婦となり平野屋の小かんといへりき。彼女は鍛冶屋の弟子平兵衛と相なじみ、播磨より迎ひのもの來りて連去らんとするに及び情死す。

「夕霧阿波の鳴戸」

夕霧阿波鳴戸

娼婦夕霧藤屋伊左衛門との間に子あり。伊左衛門勘當せらるゝに及び、夕霧之を阿波の士人平岡左近の子なりといひて左近に子登せしめり。

本戯曲は主として之を取返さんが爲めの彼等が苦心を寫せり。

「冥途の飛脚」

忠兵衛梅川　冥途の飛脚

飛脚宿亀屋の世嗣忠兵衛丹波屋八右衛門の稠人中に彼を罵りたるを怒て預りし金の封をきり、梅川を身請して親里に走りて捕へらる。

彼が傑作の一なり。

「吉野都女楠」

吉野都女楠

小山田高家新田義貞に代りて死したる所以、及び楠正成の妻が其子正行を訓ゆることを叙せり。

「弘徽殿鵜羽産家」

弘徽殿鵜羽産家

花山院の後宮弘徽殿藤壺共に懐妊し給ふ。弘徽殿の伯父大將早岩人をして藤壺を刺さしめ卵を源頼光の臣小餘綾新左衛門にぬり、又帝をも害し�らんとせしも能はざりき。弘徽殿は伯父の惡を聞て宮を出て帝亦之を慕ふて宮を出でさせ給ひしが、頼光以下の苦心により惡徒亡ぶるに至る。

「嫗山姥」

嫗山姥

源頼光が右大將高藤平正盛の謀に逢ひし事を叙し、傍ら坂田の金時の誕生を記けり。

「天神記」

天神記

時平唐使によりて菅丞相唐に遁すと詐し、流卿となることを叙せり。側寫せんが爲め、波瀾を示さんが爲に、白太夫父子を出す。

「孕常盤」

孕常盤

常盤清盛の子を孕みしを平家の兒なれば育せゞとて清盛の怒に觸れ、其父梅野の源左衛門が門前に殺されんとし、牛若馬子となりて母を引渡すに當りて

其罪の口を取りたりといへるを作れり。

「新撰大職冠」

新撰大職冠

鎌足の女藤原姫を唐の大宗の后として二國和すべしとて萬戸將軍雲宗來り使すといへるを以て起し、入鹿の專横、鎌足父子の苦慮を叙し遂に入鹿を滅ぼすに至れることを作りしもの。

「相撲入道千匹犬」

相撲入道千匹犬

鵜屋義助敵情を探らんが爲めに安東聖秀が僕となりて其女綸合姫に愛せられ、一旦捕へられて猛犬と格鬪すべく櫃中に投ぜられしも遁れ歸り、更に聖秀を招かんとし、遂に北條高時を滅ぼすに至ることを作れり。

「娥歌かるた」

娥歌かるた

齋藤瀧口頼方は宮女横笛に、左京の進義次はかるもに恐ひあひ、加賀の郡司師高に見つけられ、一旦流浪後遂に師高を殺し、再び舊に復す。

「嵯峨天皇甘露雨」

嵯峨天皇甘露雨

大海原の王子の逆謀を本とし、藤右馬の尉伸成が蛭生して修羅道畜生道餓鬼道の因果を滅することを叙し、佛氏輪廻の說を歌へり。

「持統天皇歌軍法」

持統天皇歌軍法

「生玉心中」

持統天皇の時一の宮春彦の尊は日蝕の日に生れしを以て、二の宮夏仁親王に位を禪るべく定まりしに、春彦の尊逆謀を企ることを覺したるものなり。

嘉平次おさが生玉心中

茶碗屋の嘉平次柏屋のお蝶と契り、いひなづけのおきはを嫉ひ遂に情死するに至る。

親は俠氣ある一つ家の五兵衛。

「國姓爺合戰」

國姓爺合戰

是れ古來大喝采を博したりしもの。願ふに其國粋心を歌ひしを以て、大に膨脹的國民の嗜好に投ずたるものか。

奸臣李韜天韃靼王に通ずて明帝を滅すや、忠臣吳三桂は王子を抱て九仙山に隱れ、帝妹梅檀皇女は日本に漂着せしより、明の遺臣鄭一官が日本にて娶げたる一子和唐内父母を伴ひて赴き救ひ、吳將軍甘輝をかたらひて、遂に韃靼を破ることを仕組みぬ。

「國姓爺後日合戰」

國姓爺後日合戰

和唐内功を以て延平王となりしも功名の下居り難く、遂に甘輝との間さへ相分るゝに至り東寧に退きしが、韃靼再び明を破るに及び、其子錦舍等と恢復す

「鈴の權三重帷子」

ることを叙す。

鈴の權三重帷子

茶の湯の師淺香市之進の留守の宿に、笹野權三秘傳を聽かんが爲めに音づれ、市之進の妻おさぬと爪田の嫌疑を辯するのすべなく、遂に手を捕へて走り、女敵打となる。

事實は雲州の巷說にて、伏見にてせし妻敵打の時に知られたるものなりき。

「藤の門松」

山崎與次兵衛壽の門松

難波屋與兵衛藤屋吾妻の好惡を喜び、憤慨して出奔し遂に彼女及び彼女の情郎山崎與次兵衛を救ふことを作れり。而して與次兵衛亦與兵衛の娶の身に引請けて駆逃したるを示すことを主として。

「日本振袖始」

日本振袖始

日本神代史を歌へるもの。

大山祇の臣の女木花開耶姫を姉岩長姫嫉妬することを訴き起し、素盞嗚尊出雲國の川上に至りて寶劍を取ることに至る。

「曾我會稻山」

曾我會稻山

蒲の入道範頼が劍符を與ふることより二孤の復讐に至る。曾我の復讐を作り

しものゝ中にて最も佳作と稱すべく、彼が史的戯曲中一二の作たり。

「傾城酒呑童子」

傾城酒呑童子

「酒呑童子枕賣葉」の三齣四齣五齣の初までを書き直し、娼樓主茨木屋幸齋が嬌奢殘忍なりしことを畫けり。平木の長といふは即ち幸齋をいふ。曰く、『總て酷い目を見まいと物の裏を知たり。人のおれそれ世の中の義理順義を知るが最後貧乏神が乘移る』と。

「博多少女郎波枕」

博多小女郎波枕

京の商人小町屋惣七下の關にて海賊に逢ひ、僅に其知れる娼婦小女郎を博多に訪ひたりしに、料らずも再び物の海賊を見て脅迫せられ、遂に其群に入りたることを作れり。

「本朝三國志」

本朝三國志

平將長本能寺にて惟任判官光秀の爲に弑せられ、眞柴肥前の大領久吉惟任を討て仇を復することを寫す。亦史戯曲中の見るべきもの。

「平家女護島」

平家女護島

俊寛流罪より清盛が死に至るまでの事を歌ひたるものなり。

「河内通」

河内通

井筒業平

伴の大納言宗岡惟高親王に謀叛を勸むることより説出して、業平の事蹟を畫けり。

「雙子隅田川」

雙子隅田川

吉田の少將冷房の子梅若丸の事を叙す。謠曲を本として結構したるものなるべし。

「日本武尊東鑑」

日本武尊東鑑

筑紫には八十の梟師坂東には外濃の忍熊さて東西二人の夷魁景行第二の姫宮神賢姫に婚を請ふことより起し、日本武尊を歌ふ。

「心中天網島」

心中天網島

本文「彼の文章」を評する中に記したるが如し。

「攝津國夫婦池」

攝津國夫婦池

足利義輝松永彈正の弑する所となり、細川藤孝義昭を立つることを骨子として作りしもの。

「女殺油地獄」

女殺油池獄

彼が終生中一二の傑作なり。

河内屋與兵衛なるものゝ借錢に困められて遂に豐島屋の妻お吉を故殺する

に至ることを叙す。

與兵衛の母お澤翁父德兵衛の愛と義理、お吉の同情との如き、中に就て最も見るへきものたり。

「信州川中島」

信州川中島

甲越の事を作る。山本勘介の母子弟兄及ひ夫妻、勝頼夫妻の如き一篇の骨子とす。

「心中宵庚申」

心中宵庚申

お千代半兵衛が姑の壓制の爲に情死するに至るを仕組めり。

上卷半兵衛兄弟の事を記したる一段は寧ろあらずもがな。

「關八州繋馬」

關八州繋馬

平親王將門の子將軍太郎良門が逆謀より事起る。源頼光が弟頼平は篇中最も重く畫かれたるものなり。

戯曲二様の發達

歌舞伎演劇に伴ひたる戯曲即ち脚本

眞演劇

脚本

日本戯曲の發達は二様の進路を取りたり。一は歌舞伎と稱する演劇に伴ふて。一は操と稱する木偶劇に伴ふて。

戰國以前の踏舞歌曲は今暫く論せず。室町氏の末出雲の巫女阿國大社修繕の費捐募集として通俗神樂をなしたりしもの、之を歌舞伎の始とし、後江戸に於て德川三世將軍の寛永元年に猿若勘三郎が中橋に興行したるものより起れり。然れども未た一種の茶番たるに過ぎざりき。

是より京都大坂にて次第に演劇の興るものあり、世の昇平になり行くと共に其風太だ盛なり。然るに初め男女混同して踏舞し又若衆歌舞伎と稱する少年劇にして、風俗壞亂の恐れありたるにより、四世將軍の承應元年三都の演劇禁せられ、京都にて村山又三郎なるもの若衆の前髪を剃りて男歌舞伎を始めぬ。延寶元年市川團十郎始めて舞臺に上り、所謂荒事なるものを創演して始めて日本演劇を眞成の演劇となし、遂に大に發達せしむるに至りたり。

而して之が戯曲たる所謂脚本なるものは、其初皆俳優自らの手に成り、又狂言作者として彌五衛門富永平兵衛などの人ありしも、之を作者と稱すへき程の

ものにあらず。第五世將軍の元祿の末に津打治兵衛出でゝ史的演劇に社會的演劇を交へ、始めて見るに足るべきものを出せり。嗣で堀越榮陽あり、櫻田治助あり。第九世將軍の寛延寶曆の頃に至て大に興り、十一世文恭將軍の寛政文化の昇平に逢て蜘屋南北並木五瓶等出で脚本繁昌の頂上に達しぬ。遂に下て脚本掉尾の大作者古河默阿彌に至りて今時に及べり。

操演劇に伴ひたる戲曲即ち淨瑠理

是れ其歌舞伎演劇に伴ひたる戲曲の時代となるべしと雖、往時に於て他の變則戲曲たる木偶劇に伴ひし淨瑠理なるもの却て脚本に優りたる發達をなし、歌舞伎劇は遂に模範を木偶劇に取らざるべからざるに至りき。蓋し不幸にして近松以下の著作家が木偶劇場裡にありて歌舞伎劇場裡に在らざりしに由りしなり。

而して此種の戲曲は今此書に對する關係の左まで密ならざるを以て、吾人は暫く之を細叙するを止め、眼を轉じて他の變則戲曲たりし淨瑠理につき看一看する所あらんとす。

是より先歌舞伎演劇の厳禁止せらるゝに當り、別に木偶を踏舞せしめて世の演劇的嗜好に應ぜんと欲したるものありき。而して木偶劇は優人の科白に代りて他に表情すべき唱歌者なかるべからざるを以て、其唱歌に充つべく所謂淨瑠理なるもの其採用する所となりぬ。

「淨瑠理十二段草子」

淨瑠理はもと叙事詩なり。戰國の頃に平家物語に擬して作りたる「淨瑠理十二段草子」てふ物語体の叙事詩實に之が祖たりしなり。

「草子」は源牛若が鞍馬寺を出てゝ將に奥州に走らんとし、去て三州矢矧の宿に到り、宿長の女淨瑠理姫と相逢ふ事を叙したるもの。淨瑠理の名は實に此の「草子」より出で、此草子の名は實に彼女の名より出でたりき。

すべて十二段

第一、淨瑠理御前まうし子の事。　第二、花揃の段。
第三、美人揃の段。　第四、そゝの嘗絃の段。
第五、笛の段。　第六、さかひの段。
第七、しのびの段。　第八、淨瑠理枕問答。
第九、やまと實葉の段。　第十、御坐うつりの段。
第十一、ふきあげの段。　第十二、御曹司あゴま下り。

「平家」の十二卷に擬し、「平家」の朗誦的唱歌に似せて扇を拍て節をなし、以て之を誦諭したりしが、後之を三絃に合せぬ。

薩摩淨雲
櫻井丹波
岡清兵衛と金平本

時猶文字の人少なくして一般の傾向は小說を見るよりは小說を聽くを喜び、此の「淨瑠璃草子」のみにては未た以て彼等か嗜好を飽かしむるに足らざりき。乃ち舞の本に職せたる「八島」「高館」「大職冠」「小袖曾我」「伏見常磐」の類、乃至「梵天國」「物草太郎」「文正草子」「鉢かづき」「酒呑童子」等の御伽物語さへ、同じく淨瑠璃を以て歌はれぬ。

其語調法は「平家」の語調法に由りて謠曲祭文說教等を折衷し、東都に於ける薩摩太夫淨雲によりて寛永の頃に興されたりき。弟子櫻井丹波少掾あり、寛文延寶の頃に當り、時俗の勇武を好むに乘じて、亂神怪力を叙したる金平節を語り、二尺許の鐵棍を揮ひて猜案擊節し、以て最も奮迅激越せる唱歌をなしぬ。

薩摩淨雲が語りたるは北條宮內なるものゝ作る所最も多しと云ふ。而して櫻井丹波の金平本に至りては名高き岡清兵衛の作に係り、金平の强きこと三歲の兒子にも知らるゝに至りたり。其作「金平法問論」「金平天狗問答」「金平兜論」「金平黑熊」「金平千人切」「金平大酒論」「金平最後」「金平化粧問答」「鎌倉管領結城合戰」「采女正平庭訓」等あり。

試に其一節を抄して如何なる形態を以て如何なる行文を以て成されつゝありたるかを見ん。

さても其後つら〳〵おもん見るに、天うん道にかなひ、せいさうたゞしき其時は、くわんいをながくしそんにつたへ、のどかにめぐる春の日のおさまる國こそめでたけれ。其比源のよりよし公と申は、たゞのまん中に四代の御かういん、おうぢを出てさほからず。こゝんぶそうのめい將たり。御家につたはるこうけんには、むさしの守渡部のたけつな、兵庫の守坂田の金平、さを〳〵みの守うすいのさたむれ、するがの守うちべのすへ宗、はりまの守平井の一人むしや、これを二代の四天王さがうす。ぶゆうのほまれ天下にあまねく、ゆゝしき御門の御まもりとしてたみのかまどもしづか也。是は扨置、こゝに又らくやうほり川に極大なるどんひろ長さて、すが原のながれをくみしくぞやう有。くわんらい生れ付ふゆうにして人のいせいをそばめにかけ、よこしまにくはんおをむさぼらんとするもういふさうのあく人也。したがう所の其等には、むさうの傳內さものり同源次ともみつさて、ちうや弓やに身をゆだれ大力のゆうし也。并に竹原いのくま入道らいけんさて、其たけでうにあまり、ほれあばれ、すぢふさく、偏にやしやらゞん共いつつべし。しやく年の比よりも兵法にのぞみふかく、まゑんの法をつたゑんため、十八歲の年よりわしう吉の山にさぢこもり山中をすみかはし、ぢやまんかまんの天句共に相な

土佐節

れ、兵法のなくきくもりなく、……

又二世藤屋次郎右衛門が弟子に内匠土佐少掾正勝なるものあり。東都に在りて寛文延寶の頃行はれ、土佐節と稱せられぬ。其淨瑠璃中六段物に「酒顚童子」「和田酒盛」「名護屋山三」「鹽屋文正」「現在松風」「大職冠二王殿」「紅葉狩」「楠湊川」「艷色櫻小町」「光源氏袖鏡」「難波物語」「源氏十二段」「當世薄雪」「融大臣」「遊覽抛」「定家」「土佐日記」「一の谷八島」「女眉間尺」「三世二河白道」「中將姫」「小野道風記」其他一々擧げず。

四淨瑠璃大坂、井上播磨

四に於ては淨雲の門弟子虎屋源太夫京都に來り、其門人井上播磨掾京坂的の濃婉なる一流を出して大坂に語り、寛文の頃より名高かりき。其戲曲は「新十二段」「二王の本地」「日本廻り」「船遺恨」「女袖鑑」「都女商人」「二親孝行」「金平法問靜」「白鉢の由來」「敵討の遺恨」「祇園精舍」「天鼓」(近松作)「大友眞鳥」「日本王代記」「荏柄平太」「神道鱗通」「百合若麿」「甲賀の三郎」「源平戀の遺恨」「道鬱禪師傳」「二代の敵討」「田村將軍初觀音」「理窟物語」「長谷寺利生記」「土蜘蛛退治」「金剛兵衛左文字刀」「兵庫の築島」「一休物語」「頼光跡目論」「源氏筑紫合戰」「根元曾我物語」「聖德太子傳記」「樂平一代記」「源氏熱田合戰」の頗幾百十段。

京都、宇治加賀

而して播磨に稍後れて京都に宇治加賀掾あり。源太夫の弟子伊勢宮内を師として又、一流を成す。其戲曲は彼自らに由て作られたるもあり、近松其他の人々の作りたるもあり。「大磯虎遇世記」「小唄物語」「四王母」「徒然草」「一心五戒魂」(近松作)「身代り問答」「當流小栗判官」(近松作)「弘徽殿嫉妬打」(近松作)「こよみ」「凱陣八島」「いろは物語」(加賀掾作)「葵の上」「世繼曾我」(近松作)「遊君三世相」(同上)「主馬判官盛久」(同上)「國長曾我」(同上)の如き其一二なり。

近松と竹本筑後

然れども此頃までの日本戲曲は、其實見るに足るものさてはあらざりしなり。而して其見るに足るべきものは五世將軍の貞享元祿に至り、唱歌者として竹本筑後掾出て著作者として近松門左衛門出でたるに始まりぬ。

日本戲曲史本紀に入る

彼等が出でたるは實に日本戲曲界の大革命にして、日本戲曲史は此時始めて其本紀に入りたりき。而して其千古の元祿時代に副ふべく如何に盛に如何に大に彼等が欲ひ出したりしか如何に戲曲を成功せしかは本文門左衛門を傳して記するに所の如し。

戲曲界の王都竹本座

要するに元祿正德は日本戲曲史の最高峯にして、近松が戲曲の演せらるべき竹本座は此時戲曲界の王都なりしなり。文情兼至花實雙榮の時代は彼と共に存したりき。其間實に三十年。

出雲時代

斯くて有德將軍の享保九年に近松歿して、竹田出雲戲曲著作の主權を握れり。

而して出雲は近松が晩年の史戯曲脚裁を學び、專ら意を趣向に用ひ、花漸くに落ちて實存し、形態の次第に演劇的となれるに引かへ次第に其精神を失する出雲が時代としては享保より九世將軍の寶暦に至る三十年あり。其間享保十年九月十八日初日の「大内裏大友眞島」第四齣兼道の身替りの趣向、大喝采を博し、享保十九年十月「蘆屋道滿大内鏡」演ぜられ、延享元年三月六日初日にて「ひらかな盛衰記」場に上り、延享三年七月「夏祭浪花鑑」の演ぜらる頃は、木偶劇の勢旭日の如く、歌舞伎演劇は壓倒せられて見るかげもなきに至りき。

延享四年八月二十三日初日「菅原傳授手習鑑」非常に喝采せられぬ。同十一月十六日初日「義經千本櫻」亦大評判なりき。寶保元年八月には十四日初日にて有名なる「假名手本忠臣藏」場に上りたり。

寶暦六年出雲歿して近松半二の時代來り、亦三十年にして天明三年其歿するに至りぬ。

半二時代

「小野道風青柳硯」寶暦四年十月十三日場に上り、「國姓待新田系圖」明和二年二月に「菊池大友姻袖鏡」同下く九月に「本朝二十四孝」三年正月に「太平記忠臣講釋」同下く十一月に「關取千兩幟」四年八月に「三日太平記」同下く十二月に「傾城阿波鳴戸」五年六月に「近江源氏先陣館」六年十二月に「妹背婦女庭訓」八年正月に「新板歌祭文」九年九月に場に上りしが、半二がつとめて其趣向の新奇にし、以て觀客を驚かさんと欲したりしに係らず、世は漸くに木偶劇に厭きて、遂越竹本座倒れ、新淨瑠璃滅びぬ。

竹本座倒る

元祿の近松、延享の出雲、明和の半二、相承けて次第に下りき。

竹本座の作者

而して出雲以下は皆數多の文學者を發ひて相合作せしなり。其重なるものは千前軒出雲の門人三好松洛、同く吉田冠子あり。錦文流あり。初め松田和吉と稱したりし文耕堂あり。並木千柳あり。又「植田兜軍記」の作者長谷川千四ありき。

豐竹座

以上は則ち竹本座に關する小歷史なりしも、四竹本東豐竹と稱して元祿の末より竹本座に對峙せんと欲したる豐竹座なるもの、同下く道頓堀にて立慶町に在りたり。

豐竹越前

豐竹座は竹本筑後の弟子豐竹越前少掾元祿十五年に木偶劇を創したるに始まり、竹本座に並びて亦明和の頃まで繼續しぬ。

紀海音

豐竹座に於ける戲曲作者は紀海音四澤一風並木宗輔等あり。

海音姓は榎並喜右衛門又善八と通稱し、狂歌を以て名高かりき鯛屋貞柳の弟なり。貞柳と稱しぬ。

四澤一風

並木宗輔

嘗て黄檗宗を信ず。和州柿本寺の僧となりしが、還俗して醫を業とし、大坂に居れり。又圓珠庵契沖に和學を學びたることありと云ふ。元文元年法橋に叙せられ、寛保二年十月歳八十にて歿す。

其著す所の戯曲「鎌倉三代記」「心中二腹帶」「八百屋於七歌祭文」「油屋お染秋の白絞」「平安城細石」「傾城傾子」「坂上田村麿」「信田森女占」「聖德太子舍利都」「富仁親王嵯峨錦」「播州皆根松」「鬼鹿毛武藏鐙」「傾城思升屋」「花山院都の巽」「甲陽軍鑑今樣粧」「義經新高館」「神功皇后三韓襲」「鎭西八郎唐土船」「日本傾城始」「三輪丹前能」「吳軍談比翼塚」「大友王子玉坐靴」「東山殿室町合戰」「玄宗皇帝蓬萊鶴」「傾城無間鐘」等あり き。一時豐竹座にありて竹本座に於ける近松に對抗せんと欲したるだけありて其社會戯曲の如き大に見るべきものなきにあらず。

四澤一風は大坂心齋橋南江四丁目に住む醫肆にして正本屋九右衛門といひたるものなり。年六十七を以て享保十六年五月廿四日に歿す。海音は實に彼が門人なりしとも云ふ。

其作る所の戯曲は「北條時賴記」「本朝檀特山」「建仁寺供養」「井筒屋源六戀の寒晒」「女蟬丸」「賴政追善扇の芝」「南北軍問答」「身替弓張月」等あり。

並木宗輔は通稱を松屋宗輔といひ、舍柳と號せり。一風にならひて享保の始より戯曲を作り、著作多し。「釜淵雙流巴」「忠臣舍短冊」「那須與一西海硯」「湖水桑門筑紫碁」「和田合戰女舞鶴」其他にして「一の谷嫩軍記」は其半を稿したるものなり。

文柄東に移りて竊内鬼外出づ

彼寛保二年に江戸に行きしが、數年にして歸り、寛延二年九月五十七にて歿せり。

此外田中千柳、安田蛙文、並木丈助、並木五瓶、淺田一鳥、中村阿契、菅專助、近松東南、若竹笛躬等皆豐竹座の作者なり。

斯くて貞享元祿より八十年にして、竹豐二座倒れ、同時に戯曲の新作も絶え、大坂の戯曲界に於ける文柄は遂東都に移りて竊内鬼外出で、其豪宕不羈の才を以て掉尾の作數篇を出しぬ。

木偶劇に被らしむへき新戯曲滅す

十世俊明將軍家治の明和七年正月に「神靈矢口渡」出で、八年正月に「弓勢智勇淡」出で、安永三年正月に「前太平記古跡鑑」出で、七年九月に「嫩葉相生源氏」出で、八年二月に「荒御靈新田神德」出づ。又「源氏大草子」「忠臣いろは實記」「賢生源氏金玉櫻」等の作あり。

其他松貫四吉田角丸等の「戀塚背八丈」「伽羅先代萩」「紀上太郎焉馬等の「碁太平記白石噺」の如きものなきにあらざりしも、其見るべきもの幾何もなし。其音節

は幾多の流派に分れたりしに係らず、木偶劇に被らしむへき新戯曲は全く滅するに至れり。恰も是木偶劇の歌舞伎劇に併せらるゝ時にして、寛政文化の並木五瓶鶴屋南北等出で、演劇界の主權は遂に全く歌舞伎劇に歸しける。

世は歌舞伎時代となりぬ。

異

巻末に書す

匡廬の山、右よりして之を望めば峰たり。左よりして之を望めば嶺たり。或る意義に於て近松門左衛門亦之に類するものなきにあらず。觀る所の處を異にすれば從て其見る所を同ふせさるもの、豈彼の彼たる所以にあらずや。彼に對する解釋固より本書を以て悉せりとするにあらず。

彼は最も少なく自家を説明したる人なり。其現實界に於ける生涯の極めて遡として知るべからざるのみならず、其理想界に於ける生涯も亦極めて遡焉たりき。彼は全く自家の影子を其著作の上に留めざりき。是の故に彼が思想は之を思想として解するも或は却て無想なりしやも未だ知るべからざるあり。吾人は唯之を斯く〳〵の思想に

歸納し得べしとしたるのみ。

淨瑠理は本叙事詩の一種より進化したるものにして、其最初に出でたる淨瑠理十二段草子か純然たる叙事詩否寧ろ半は散文に似たる叙事詩なることは言ふまでもなし。之を木偶劇に被らしめてより後も猶重きを唱歌(語ると稱す)に置き、一方には木偶劇に用ふる脚本となし、一方には叙事詩として唱歌の用に供したり。門左に至り『淨瑠璃は人形にかくるを第一とすれば、文句皆活動を肝要とす。』と稱し、之を耳に訴ふるの美術としたると共に亦重きを目に訴ふるの美術としたる上に置きたりき。然れども其史的淨瑠理(形躰の或點に於ては社會戲曲も)に至りては或は之を戲曲と稱するよりは、之を叙事詩と稱するを適當とすへき觀なきにあらず。今假りに淨瑠理のすべてを演劇脚本に併せて之を戲曲と稱したるは、其用より論したるのみ。

彼が史的戲曲は其性質より論ずれば、或は之を理想戲曲と稱して可なるに似たり。然れども余は其資材の上より見て皆之を史的戲曲と稱したり。蓋假に從來の稱呼に從へるなり。又悲戲曲喜戲曲若くは悲歡戲曲等の區別をもなさず。煩を避くるの外他意あるにあらず。

彼の著作百餘種。本書に表錄するもの丶外猶若干あり。匆卒の際未た眞否を考定するの暇を有せざるが爲め、今暫く疑を缺く。異日之を補正すべき時あるを信ずればなり。

「著作一斑」はもと彼が著作の結構を示し、以て其梗概を知るに便ぜしめしものなりしが、紙數の增加は更めて縱に其極めて簡畧なる解題の外何物をも存する能はざるに至らしめり。而して彼の著作中名を「著作表」に錄して梗概を「著作一斑」に載せさるものあるは、其未た閲覽に暇あらさるものに係る。亦異日の補正を待つのみ。

彼の肖像は、建仁寺杉原中谷氏所藏として「睡餘小錄」に寫載したるもの世に傳ふ。衣冠正坐、坊間圖する所の柿本人麿然たり。頗る疑ふべし。此書掲くる所は「難波土產」より取りたるものにして、曾て金僊久保田氏に囑して之を摸寫せしめ置けり。後正直關根氏を訪ひ談彼が肖像に及びし事ありしが、氏も之を眞に近かるべしと云ひき。

「難波土產」は彼が生前最も親しかりし友の一人浪華の儒醫穗積以貫の著にして、彼が沒後十年に世に公にせられたるもの。

彼が自筆の戲曲草稿は、我友成明櫻井氏の珍藏する所に係る。もと浪華の好事家梅園の有せしものにして、梅園十餘卷の大册を作りつゝ其蒐集したる今古の奇書畫を貼附し之を藏したりしに、維新爭亂の後轉して一骨董舗頭に在りたり。成明氏の先考偶之を得、成明氏後其幾片を留めて屏風を作り、他は之を書肆吉川氏に與へたりと云ふ。卷首に掲くる所のものは則ち氏が屏風に殘りたるものにて、所謂二葉の內の他の一葉は今篁村巍庭氏之を秘藏す。

草稿は彼が六十七の作たる「平家女護島」の首段、重衡南都より凱旋し其戰狀を報告して僧文覺を討漏したりといふに及び、清盛が恚り憾む一節なり。所謂御家流にして暢健流麗躍として生動の致あり。其文は今本傳ふる所と同じからす。曰く、

『ヱ、腹立や、何條小僧めが。うちもらしたんな。頼朝冠者めをしたひ蛭か小島へはしりつらめ。よし〳〵いつくにかくるゝ共運つよき此禪門からめとらでをくへきか。大敵義朝も、白骨と成ても二たひ足下に來る我威勢。亡魂今本は則ち曰ふ。

『ヱ、にくや〳〵此禪門を亡さん

とせし義朝、白骨と成ても二たび足下來る。入道がゐせい思ひ知れ。』

寧ろ前者の文をなせるに如かざるなり。未た彼が異日の手に由て改削せられし乎、將た後人の爲に改められし乎を知らずと云ふ。

明治二十七年十月十一日、城西霞臺停春樓下春光住めて薔薇の一種長春花の枝に在る處に著者識す。時に曉露未た晞かずして花に在るもの五點三點。

大正十三年一月五日。讀了。（丟）

明治二十七年十一月一日印刷
明治二十七年十一月四日發行
明治二十七年十一月十一日再版印刷發行

定價拾八錢

著作者　東京市麻布區霞町廿二番地　塚越芳太郎
發行者　東京市京橋區日吉町四番地　垣田純朗
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十六番地　山本鐵次郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

版權所有

~~19~~ 16

70
118

70
118

085024−000−3

70−118

近松門左衛門

塚越　芳太郎／著

M27

DBB−0455